

— 千葉県市原市 —

なか うる が ひろ てん のう だい
中潤ヶ広遺跡・天王台遺跡

1988

市原市土木部道路建設課
財団法人 市原市文化財センター

序 文

房総半島東京湾岸の中央部に位置する市原市は、自然環境に恵まれ、県下でも有数の遺跡が残されており、特に古代においては上総国の中心地として国府・国分僧寺・尼寺がこの地に置かれました。このことはこの地域が古くから生活の場、歴史の舞台として人々に受け継がれ発展してきたことを物語っております。これらの文化財を保存、活用し後世に継承してゆくことは、我々市民に課せられた課題であり、切望するところでありますが、一方では首都圏に位置し、東京のベッドタウンとしての宅地造成やレジャー施設としてのゴルフ場建設等々も増加の一途をたどっており、市内における道路網等の整備事業は急務であると言えます。

これらの市民のより良い生活、環境作りのために行なわれる諸々の整備は、一方では地中に長い間眠ってまいりました我々祖先の残した“埋蔵文化財”を破壊してしまうこともあり、開発と埋蔵文化財保護との調和の必要性が強く求められております。

今回ここに中潤ヶ広遺跡・天王台遺跡として報告する調査は、市原市が進めております道路網整備の一つである帝京技術科学大学関連道路改良工事に先行して、建設と埋蔵文化財保護との調整に基づき、記録保存として実施したものであります。

本書は、この調査によって得られた成果をまとめたものであり、学術的な資料としてはもとより、広く一般市民の方々にも活用され、今後の埋蔵文化財の保護、涵養のために役立つことができれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたり御指導・御協力を賜りました、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課及び土木部道路建設課の関係諸機関・諸氏に対し厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月25日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市潤井戸中潤ヶ広1609番地 他に所在する中潤ヶ広遺跡と、同市潤井戸字天王台2270-2番地 他に所在する天王台遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、市原市（道路建設課）による帝京技術科学大学関連道路建設に伴い実施したものである。
3. 発掘調査・整理作業は以下のとおり行った。

発掘調査	中潤ヶ広遺跡	昭和61年1月4日～昭和61年2月28日
		担当 近藤 敏
	天王台遺跡	昭和63年2月1日～昭和63年3月31日
		担当 木對和紀
整理作業		昭和63年2月1日～昭和63年3月31日
		担当 木對和紀
4. 本書の原稿執筆は、木對和紀が行った。
5. 発掘調査から整理作業の課程で、以下の諸機関から御指導・御協力を賜った。
市原市土木部道路建設課、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課
6. 本書に使用した方位は座標北である。
7. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1：25,000蘇我及び市原市発行の市原地形図C6・C7（1：2500）である。

（財）市原市文化財センター組織表

昭和60年度（発掘調査）

役員

理事長 星野一郎（教育委員会教育長）
 副理事長 横濱辰夫（教育委員会教育指導部長）
 常務理事 内藤隆（専任）
 理事 滝口宏（早稲田大学名誉教授）
 理事 寺村光晴（和洋女子大学教授）
 理事 海上信久（姉崎神社宮司）
 理事 松崎良一（市企画部長）
 理事 斎藤栄亮（市総務部長）
 理事 中島英夫（市都市部長）
 理事 松下隆（市総務部財政課長）
 監事 白鳥一夫（市会計課長）
 監事 松本辰之助（教育委員会総務課長）

職員

庶務課 課長 田丸萬富
 主事 補大鐘光江
 事務員（嘱託） 秋田晴美
 事務員（嘱託） 藤澤ひとみ
 事務員（嘱託） 石渡あゆみ
 調査課 課長 清藤一順
 主幹 石田広美
 主幹 山口直樹
 主任調査研究員 宮本敬一
 調査研究員 米田耕之助
 調査研究員 田中清美
 調査研究員 近藤敏
 調査研究員 高橋康男
 調査研究員 田所真
 調査研究員 浅利幸一
 調査研究員 大村直
 調査研究員 木對和紀
 調査研究員（嘱託） 鈴木英啓
 調査研究員（嘱託） 半田堅三
 調査研究員（嘱託） 田中新史
 事務員（嘱託） 高浦貞子

昭和62年度（発掘調査・整理作業）

役員

理事長 星野一郎（教育委員会教育長）
 副理事長 大野峻（教育委員会教育指導部長）
 常務理事 岩見一民（専任）
 理事 滝口宏（早稲田大学名誉教授）
 理事 寺村光晴（和洋女子大学教授）
 理事 海上信久（姉崎神社宮司）
 理事 飯山英雄（市企画部長）
 理事 宮崎芳雄（市総務部長）
 理事 地引希彦（市都市部長）
 理事 安藤隆一（市総務部財政課長）
 監事 斎藤崇雄（教育委員会総務課長）
 監事 元吉末喜（市会計課長）

職員

庶務課 課長 田丸萬富
 主事 補大鐘光江
 事務員（嘱託） 秋田晴美
 事務員（嘱託） 石渡あゆみ
 調査課 課長 清藤一順
 主幹 石田広美
 主幹 加藤正信
 主任調査研究員 宮本敬一
 主任調査研究員 米田耕之助
 調査研究員 田中清美
 調査研究員 浅利幸一
 調査研究員 大村直
 調査研究員 近藤敏
 調査研究員 高橋康男
 調査研究員 田所真
 調査研究員 木對和紀
 調査研究員（嘱託） 田中新史
 調査研究員（嘱託） 半田堅三
 事務員（嘱託） 高浦貞子
 調査補助員（嘱託） 田中裕子

本文目次

序文

理事長 星野一郎

例言

(財)市原市文化財センター組織表 (昭和60年度・昭和62年度)

第Ⅰ章 序説	1
Ⅰ 調査に至る経緯と経過	1
Ⅱ 遺跡の位置と歴史的環境	1
第Ⅱ章 中潤ヶ広遺跡	8
概要	8
遺構と遺物	8
1号遺構	8
2号遺構	8
3～8号遺構	11
第Ⅲ章 天王台遺跡	12
概要	12
遺構と遺物	12
1号遺構	12
2号遺構	12
3号遺構	12
4号遺構	17
5号遺構	20
6号遺構	22
7号遺構	22
8号遺構	24
遺構外出土遺物	24
第Ⅳ章 まとめ	25

挿 図 目 次

第1図	中潤ヶ広・天王台遺跡の位置と周辺遺跡	---- 3	第12図	天王台遺跡	3号遺構出土遺物実測図1	----15
第2図	中潤ヶ広遺跡周辺地形図	----- 4	第13図	天王台遺跡	3号遺構出土遺物実測図2	----16
第3図	中潤ヶ広遺跡遺構配置図	----- 5	第14図	天王台遺跡	4号遺構実測図	-----18
第4図	天王台遺跡周辺地形図	----- 6	第15図	天王台遺跡	4号遺構出土遺物実測図	-----19
第5図	天王台遺跡グリッド配置図及び遺構配置図	--7	第16図	天王台遺跡	5号遺構実測図	-----20
第6図	中潤ヶ広遺跡1号遺構実測図	----- 8	第17図	天王台遺跡	6号遺構実測図	-----21
第7図	中潤ヶ広遺跡2号遺構墳丘測量図	----- 9	第18図	天王台遺跡	5号・6号遺構位置図	-----21
第8図	中潤ヶ広遺跡2号遺構及び出土遺物実測図	--10	第19図	天王台遺跡	6号遺構出土遺物実測図	-----22
第9図	中潤ヶ広遺跡3・4号遺構実測図	-----11	第20図	天王台遺跡	7号・8号遺構実測図	-----23
第10図	天王台遺跡1・2号遺構実測図	-----13	第21図	天王台遺跡	遺構外出土遺物実測図	-----24
第11図	天王台遺跡3号遺構実測図	-----14				

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	----- 2	第4表	天王台遺跡4号遺構出土土器観察表	-----19
第2表	中潤ヶ広遺跡2号遺構出土土器観察表	----- 11	第5表	天王台遺跡6号遺構出土土器観察表	-----22
第3表	天王台遺跡・3号遺構出土土器観察表	----- 17	第6表	天王台遺跡新旧遺稿番号一覧表	-----26

図 版 目 次

図版一	中潤ヶ広遺跡近景 中潤ヶ広遺跡1号遺構全景		図版六	天王台遺跡4号遺構確認状況 天王台遺跡4号遺構全景	
二	中潤ヶ広遺跡2号遺構検出状況 中潤ヶ広遺跡2号遺構周溝内遺物出土状況		七	天王台遺跡5号・6号遺構検出状況 天王台遺跡5号遺構全景	
三	天王台遺跡近景（西側より） 天王台遺跡近景（東側より）		八	天王台遺跡6号遺構遺物出土状況 天王台遺跡7号・8号遺構検出状況	
四	天王台遺跡1号遺構全景 天王台遺跡2号遺構全景		九	中潤ヶ広・天王台遺跡出土遺物	
五	天王台遺跡3号遺構遺物出土状況 天王台遺跡3号遺構検出状況		十	天王台遺跡出土遺物	

第 I 章 序 説

I 調査に至る経緯と経過

帝京技術科学大学の建設に伴い、市原市では同大学への進入路を新たに建設することになった。建設工事に先立ち、市原市長井原恒治は、事業地域内における「埋蔵文化財の存在の有無及びその取扱い」についての照会を市原市教育委員会教育指導部文化課に提出し、これを受けた千葉県教育庁文化課、市原市土木部道路建設課及び市原市教育委員会教育指導部文化課の三者によって協議が行なわれた結果、事業地域内における埋蔵文化財については「記録保存」とする方針が決定され、発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの受託事業として、市原市潤井戸字中潤ヶ広1609番地他に所在する「中潤ヶ広遺跡」を昭和60年度に、同字天王台2270-2番地他に所在する「天王台遺跡」を昭和62年度事業として実施した。

「中潤ヶ広遺跡」における発掘調査期間は、昭和61年1月4日より開始し、同年2月28日に終了した。「天王台遺跡」については、発掘調査を昭和63年2月1日に開始し、同年3月31日まで行ない、あわせて期間中に中潤ヶ広遺跡・天王台遺跡の整理作業・報告書刊行を行った。

II 遺跡の位置と歴史的環境

中潤ヶ広遺跡は、東側を村田川中流域が、西側を村田川南岸に灌ぐ最大支流の一つでもある神崎川中流域が形成する小支谷に面した標高42m前後の舌状台地最狭部に位置し、天王台遺跡は、この舌状台地先端部に挟まれた標高24m前後の神崎川中流域に面する谷津の最奥部の平坦面に位置している。

この両遺跡の存在する村田川中流域には、弥生時代から古墳時代の遺跡が集中しており、該当期における一つの文化の中心的な存在を形成しているものと考えられる。特に北岸においては、大規模な開発事業に伴い広範囲にわたる発掘調査が実施されており、草刈遺跡やこれに隣接する草刈六之台遺跡・川焼台遺跡など、この地域では宮の台式期以降の多数の遺構が検出されている。

これに対する南岸は、断片的な発掘調査が多く全貌は不明な点も多いが、該当期における調査を実施した遺跡には西山遺跡・菊間手永遺跡・菊間遺跡・大厩遺跡・祭り野遺跡・下鈴野遺跡^(註1)等がある。古墳群について言及すれば、菊間古墳群はこの地に君臨した菊間国造の奥津城と考えられており、東関山古墳・菊間天神山古墳・姫宮古墳・菊間新皇塚古墳など、古くから著名な古墳が存在している。また天王台遺跡を挟む台地上には、天王台古墳群・居鞍古墳群が存在^(註2)しており、天王台遺跡との関連が注目されている。中潤ヶ広遺跡の周辺、半径 200m前後の

範囲には、肉眼で墳丘が観察される古墳は存在していないが、北西方向約 500m を中心とする地点には、上潤ヶ台古墳群が存在しており、中潤ヶ広 1 号墳も上潤ヶ台古墳群の範疇に属するものと考えられる。
(註 3)

この他注目すべき古墳群として前方後円墳を中心とする杉山古墳群・山王後古墳群などが潤井戸の台地東側に存在している。
(註 4)

しかしながら古墳の調査例は少なく、当該地における古墳の様相の全貌を知るには今だ不明な点が多い。

註 1 鈴木英啓 1986『潤井戸西山遺跡』(叻市原市文化財センター

村田川中流域南岸の古墳群について詳細な踏査をもとに報告している。

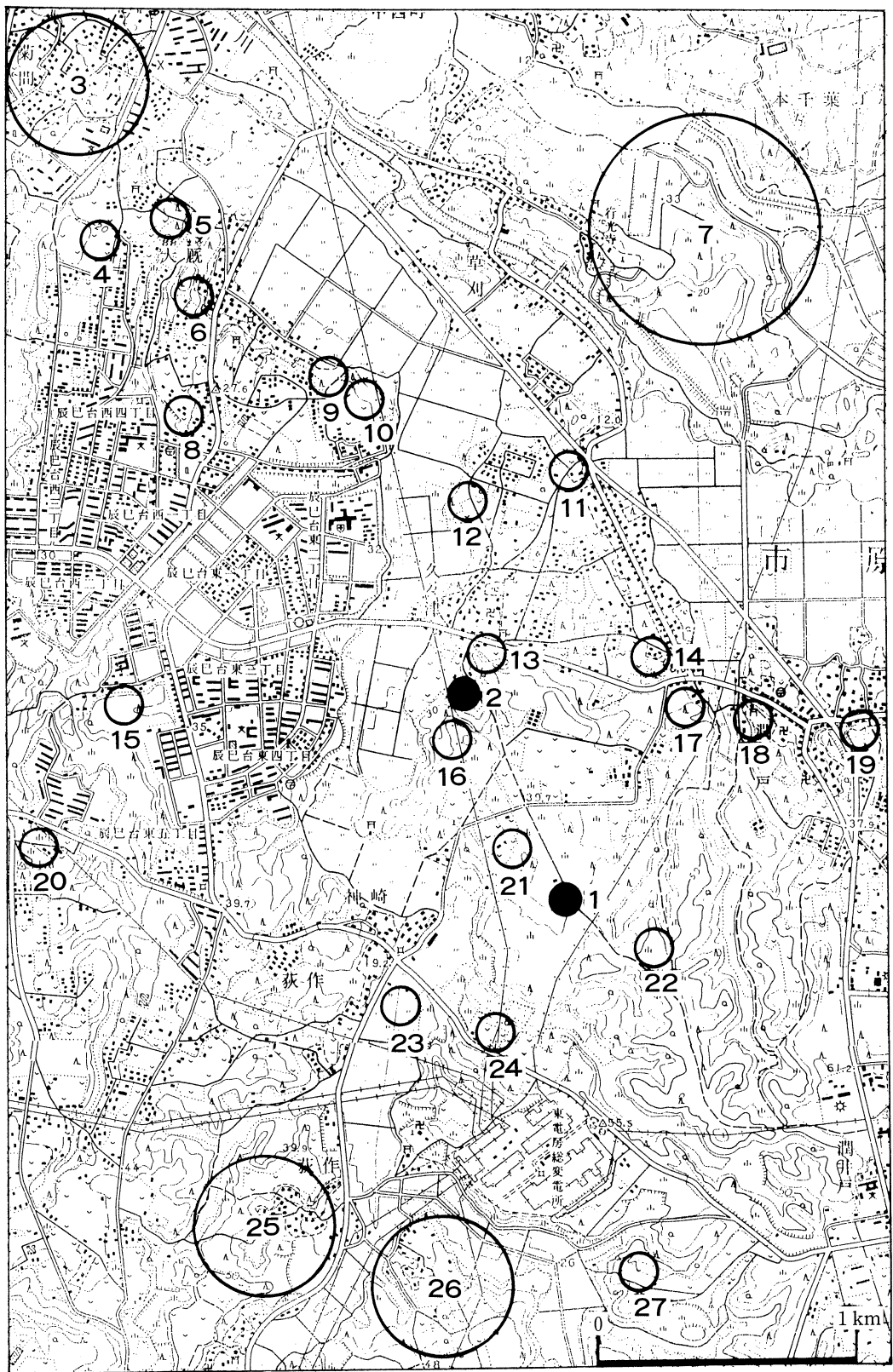
註 2 「千葉県遺跡分布図」の名称によれば、天王台・居鞍・上潤ヶ台古墳群は潤井戸古墳群と総称されているが、註 1 の報告書により天王台・南大林・上潤ヶ台古墳群の 3 群に分離されている。また南大林古墳群の一部は現在(叻市原市文化財センター)によって居鞍遺跡として調査継続中であり、居鞍古墳群の名称が妥当と考えられる。

註 3 註 1, 註 2 参照

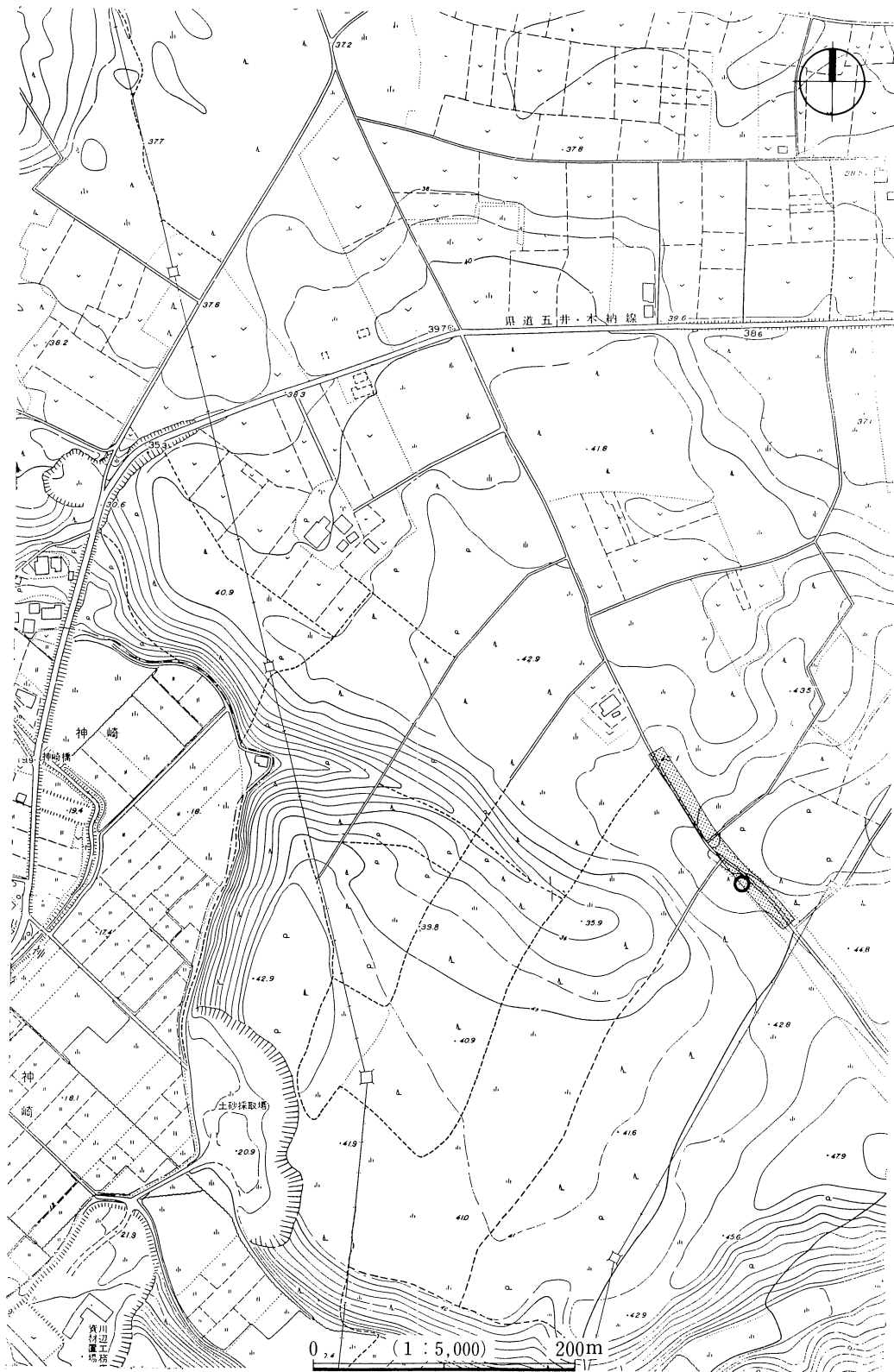
註 4 1975 年市原市調査、田中清美氏の御教示によれば直刀 2 本と鉄鏃 1 点を検出し、6 C 代の造営と考えられている。

第 1 表 周 辺 遺 跡 一 覧 表

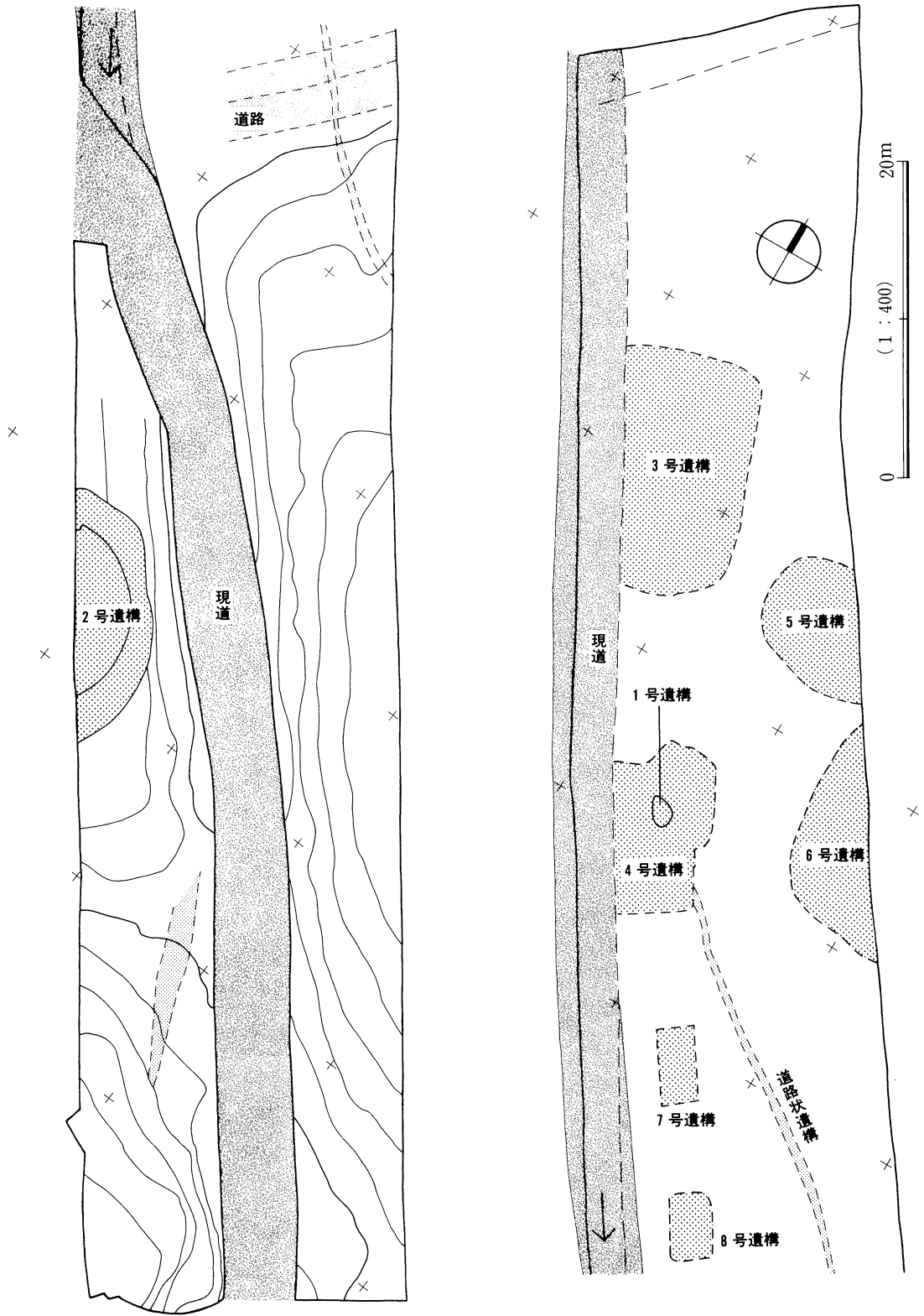
1	中潤ヶ広遺跡	15	辰巳台東遺跡
2	天王台遺跡	16	潤井戸天王台古墳群
3	菊間遺跡群	17	潤井戸山王後古墳群
4	辰巳台遺跡	18	潤井戸小谷古墳群
5	大厩二子塚古墳	19	寺谷古墳群
6	かねほり塚古墳	20	南大広遺跡
7	草刈遺跡群	21	潤ヶ広遺跡
8	大厩弁天台遺跡	22	下鈴野遺跡
9	大厩浅間様古墳	23	能満分区貝塚
10	大厩古墳群	24	潤井戸祭り野遺跡
11	潤井戸西山遺跡	25	荻作台山遺跡
12	久々津古墳群	26	荻作古墳群
13	居鞍遺跡	27	開化野遺跡
14	潤井戸杉山古墳		



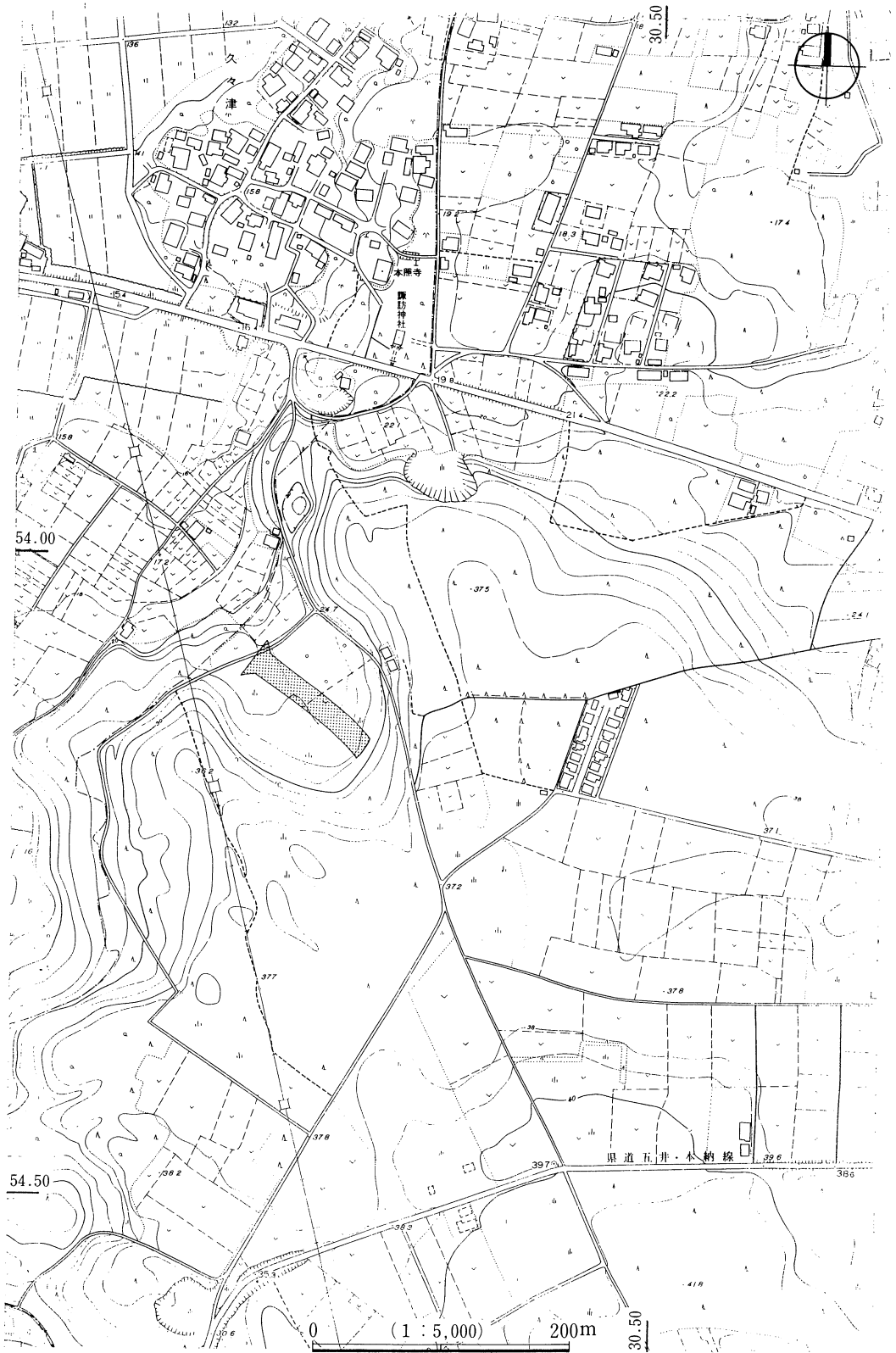
第1図 中潤ヶ広・天王台遺跡の位置と周辺遺跡



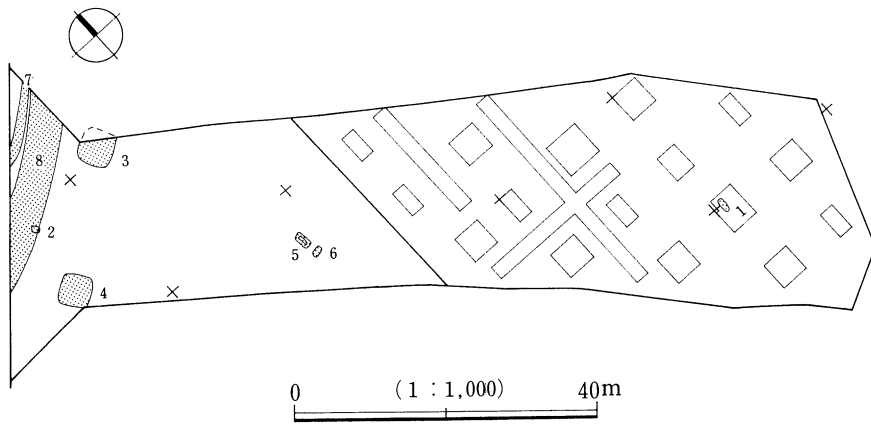
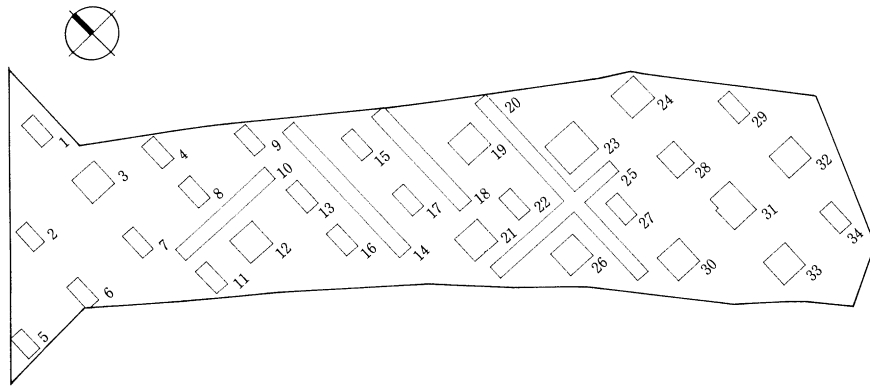
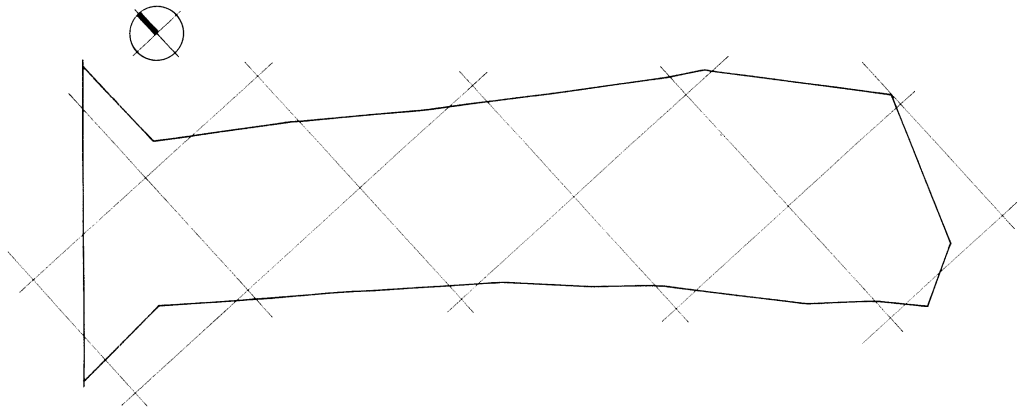
第2図 中潤ヶ広遺跡周辺地形図



第3図 中潤ヶ広遺跡遺構配置図



第4図 天王台遺跡周辺地形図

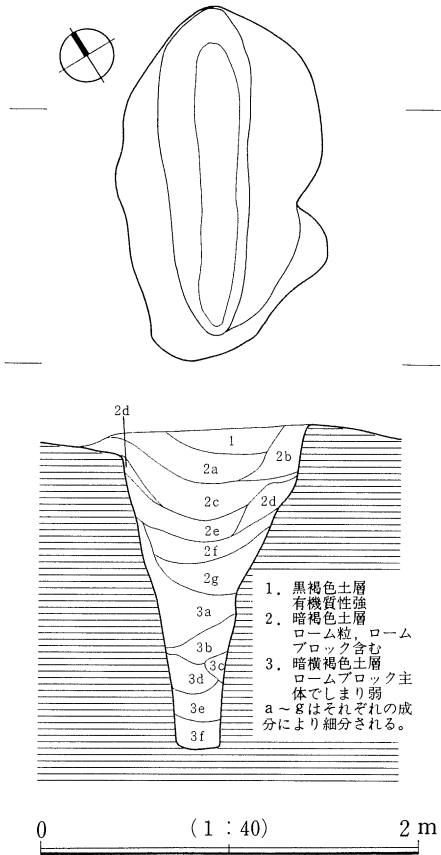


第 5 図 天王台遺跡グリッド配置図及び遺構配置図

第II章 中潤ヶ広遺跡

概要 中潤ヶ広遺跡における今回の発掘調査対象地は、第2図に示したスクリーン色の範囲である。調査地には現道が走っており、道路部分については一部を除いて調査を実施することができなかった。

検出された遺構は、縄文時代のいわゆる陥し穴状遺構である土壇1基、古墳時代後期に属する円墳1基の他に、時期・性格とも不明な基壇状遺構が6ヶ所に検出されている。



第6図 1号遺構実測図

溝外縁径17m前後の規模をもつ円墳と推定される。封土は、旧表土と考えられる黒褐色土層の上に直接盛土されており、ローム粒、ロームブロックを主体とする褐色土層と、有機質土中にローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土層によって構築されている。墳丘と周溝の間は、土層断面によれば、旧表土と考えられるII層上面が若干周溝に向かって削平されており、あるいはテラス部分として意識的に形成されていたものと推定される。周溝は全周するものと推定され、確認面における周溝上端幅は、北側・南側でそれぞれ2.3m前後を測る。ハードローム層まで掘り込まれ、深さは40cm前後を測る。底面・側壁とも明瞭に検出され、底面は若干の凹凸

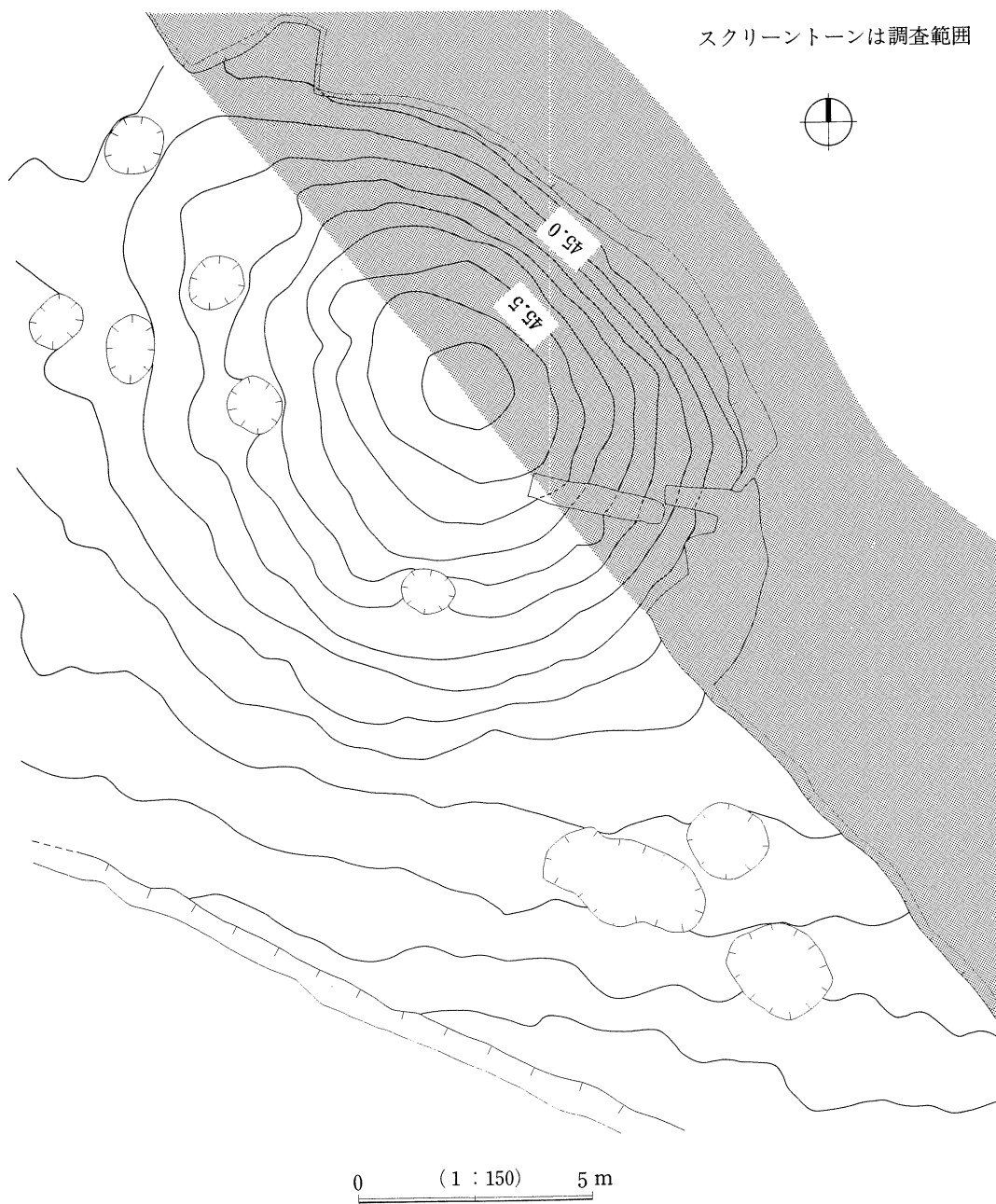
遺構と遺物

1号遺構 (第6図・図版一)

調査区域北端より約48m、4号遺構(基壇状遺構)の直下に検出されている。平面形は不整な楕円形を呈し、長軸1.88m、短軸0.92m、深さは検出面より1.77mを測る。長軸方位はN-32°-Eを示す。底面はほぼ平坦であり、Pit等は検出されない。壁は急激に立ち上っており、遺物はまったく検出されなかった。

2号遺構 (円墳) (第7・8図, 図版二・九)

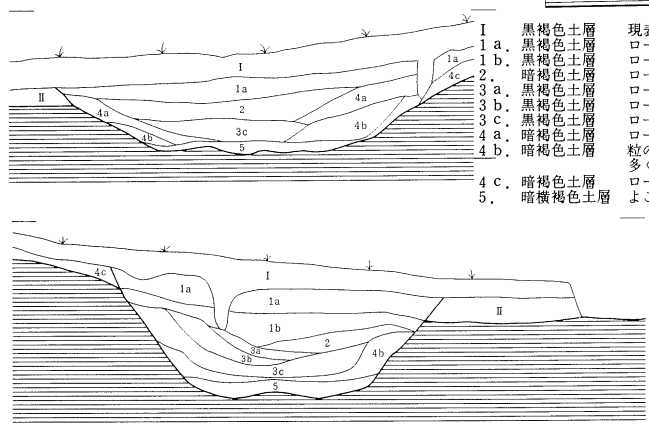
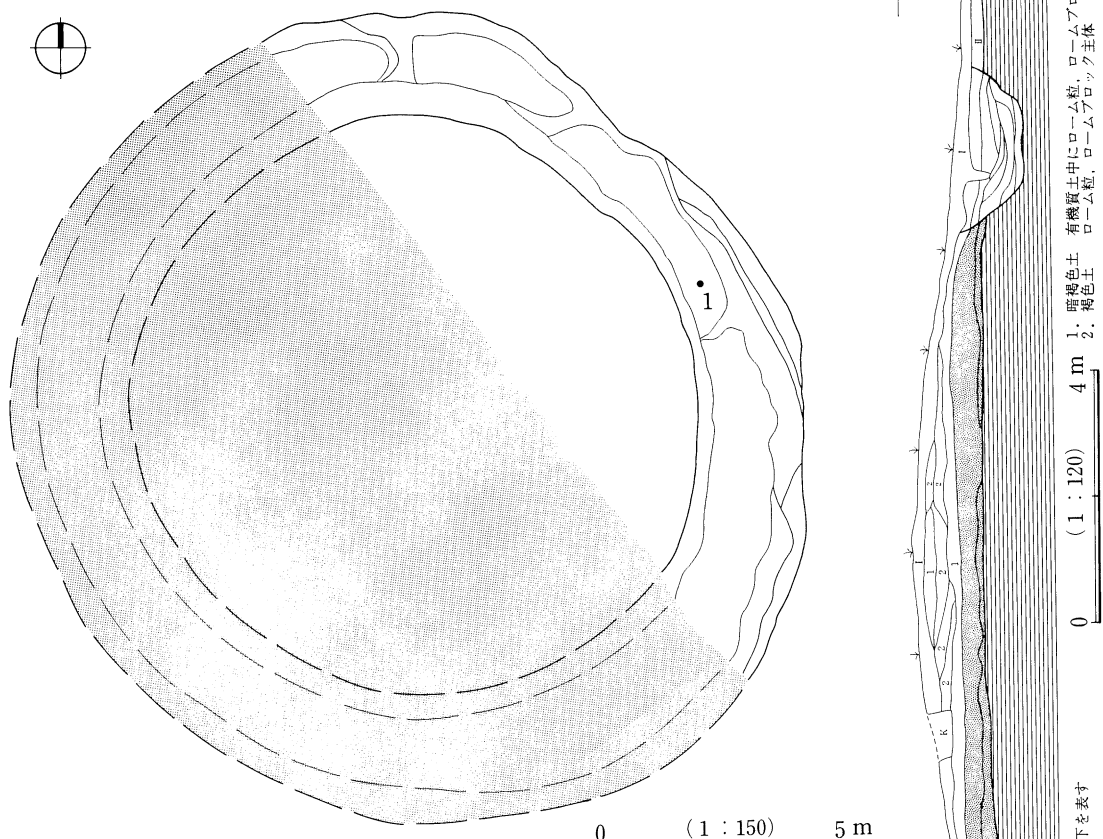
調査区域南端より約36m~52mの範囲において、半円状の周溝が確認されている。墳丘は現状でも残存しており、調査前の墳丘状況を第7図に示す。遺構の約3/5は調査区域外に存在しており、全貌は明らかではないが、検出された周溝より判断して、周溝外縁径17m前後の規模をもつ円墳と推定される。封土は、旧表土と考えられる黒褐色土層の上に直接盛土されており、ローム粒、ロームブロックを主体とする褐色土層と、有機質土中にローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土層によって構築されている。墳丘と周溝の間は、土層断面によれば、旧表土と考えられるII層上面が若干周溝に向かって削平されており、あるいはテラス部分として意識的に形成されていたものと推定される。周溝は全周するものと推定され、確認面における周溝上端幅は、北側・南側でそれぞれ2.3m前後を測る。ハードローム層まで掘り込まれ、深さは40cm前後を測る。底面・側壁とも明瞭に検出され、底面は若干の凹凸



第7図 2号遺構墳丘測量図

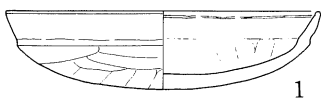
面をもっている。断面は逆梯形を呈しており、覆土は自然堆積の状況を示す。ただし東側周溝付近は若干の斜面を形成しており、周溝の掘り込みも浅く幅も一定ではない。

埋葬施設は墳丘内及び周溝内においても検出されていない。おそらく未調査部分である残り約 3/5の範囲内に埋葬施設が存在するものと推定される。

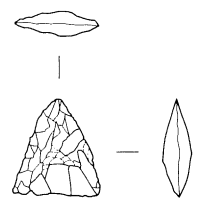


- | | | |
|------|--------|-------------------------|
| I | 黒褐色土層 | 現表土 |
| 1 a. | 黒褐色土層 | ローム粒若干混入する |
| 1 b. | 暗褐色土層 | ローム粒まばらに散る |
| 2. | 暗褐色土層 | ローム粒、ローム小ブロック含む |
| 3 a. | 黒褐色土層 | ローム粒が散在する |
| 3 b. | 黒褐色土層 | ローム粒や多く含む |
| 3 c. | 黒褐色土層 | ローム粒、ロームブロックやや多く含む |
| 4 a. | 暗褐色土層 | ローム粒、ローム多量に含む |
| 4 b. | 暗褐色土層 | 粒の大きいローム粒、ロームブロックやや多く含む |
| 4 c. | 暗褐色土層 | ローム粒やや多く含む |
| 5. | 暗横褐色土層 | よこれたロームを多量に含む |

0 (1 : 60) 2 m



0 (1 : 3) 10cm



0 (2 : 3) 5cm

I. 現表土 スクリュートートンII層以下を表す
 0 (1 : 120) 4 m
 1. 暗褐色土 有機質土中にローム粒、ロームブロックを混じえる
 2. 褐色土 ローム粒、ロームブロック主体

第 8 図 2号遺構及び出土遺物実測図

44.0

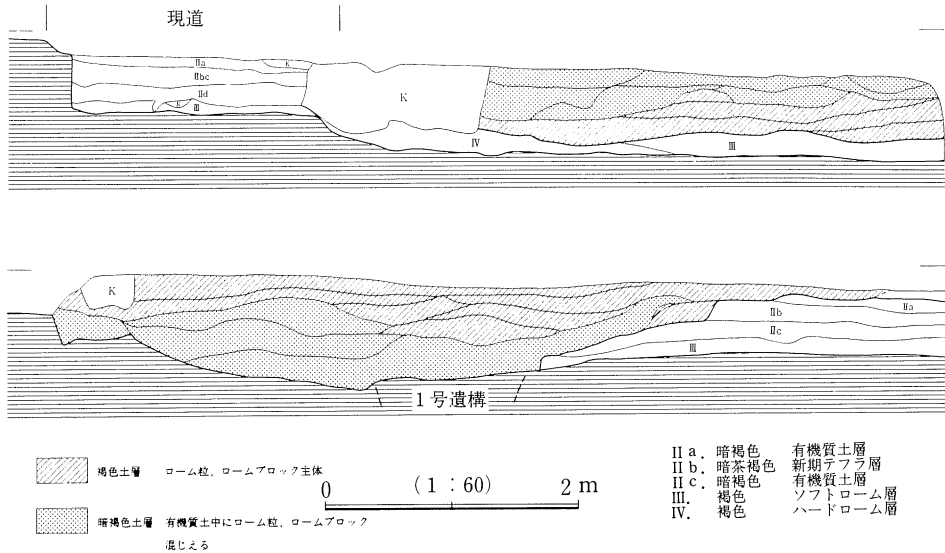
45.0

5.5A

遺物は、東側周溝内覆土中より土師器杯1点と須恵器甕の小片が2点検出されている。このうち図示可能な杯1は、周溝底面より約20cm浮いた状況で底部を上に向けて検出されている。また2は、墳丘盛土中より検出された黒曜石製の石鏃であり、本遺構に直接伴うものではない。

第2表 2号遺構出土土器一覧表

図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	杯 完	12.4	—	3.1	良好	暗褐色	密	口辺は八字状に外反、体部に段状の稜をもつ。内面は沈線状に凹部がほぼ全周し、器厚は薄い。口辺は内外面とも丁寧な横ナデ、体部外面は鋭削り後ナデ、内面は磨き。	器形の特徴等により須恵器蓋模放の土師器であり、6C後葉の所産と考えられる。



第9図 3号・4号遺構実測図

3～8号遺構 (第3・9図)

比較的遺存状況の良好だった3号・4号遺構の土層断面を第9図に示した。基本的にはローム粒・ロームブロックを主体とする褐色土層と、有機質土中にローム粒・ロームブロックを混じえる暗褐色土層とによって構築されており、硬く締まっている。表土を伴っておらず、現道と同一レベルで観察されることから比較的新しい時期の遺構と考えられる。基本土層II層以下を確実に切っており、あきらかに人為的構築物ではあるが、遺物・礎石・柱穴痕跡等はまったく検出されなく、本遺構を建物跡と考えるには若干の疑問を覚えるが、構築状況が基壇状であることから、比較的新しい時期の基壇状遺構として報告しておく。

この他、4号遺構より東側至る間に道路状遺構と思われる硬化した面が2ヶ所検出されたが掘り込みも浅く、時期等については不明である。

第三章 天王台遺跡

概要 天王台遺跡における今回の発掘調査対象地は、第4図に示したスクリーン上の範囲である。南側の谷津最奥部における表土からソフトローム層までの基本土層の遺存状況は、極めて良好であり、深さは、1.6m前後を測る。No.25トレンチ西端付近までこの基本土層は、深さを徐々に浅くしながらも遺存しており、No.25トレンチ西端部付近における表土からソフトローム上面までの深さは、0.6m前後を測る。ただしこのNo.25トレンチ西端部から、さらに西側に展開する本調査対象地域の現表土下は、8号遺構付近を除いてソフトローム層に達するまで土取りが行なわれており、遺存状況は極めて悪い。また該当地域の現況は樹齢12～3年の若杉の植林地であったが、調査中に落花生が検出されており、それ以前は畑地であったことが推定され、土取りは畑地開墾以前に行なわれたものと考えられる。以上のことから、該当地域の遺構遺存状況は、かならずしも良好な状況ではなかったが、縄文時代の土壇2基、弥生時代末～古墳時代初頭の住居跡2軒及び木棺墓1基、土壇1基、近世の道路1条及び溝1条が検出されている。

遺構と遺物

1号遺構（第10図・図版四）

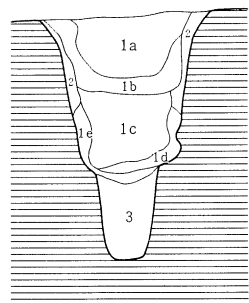
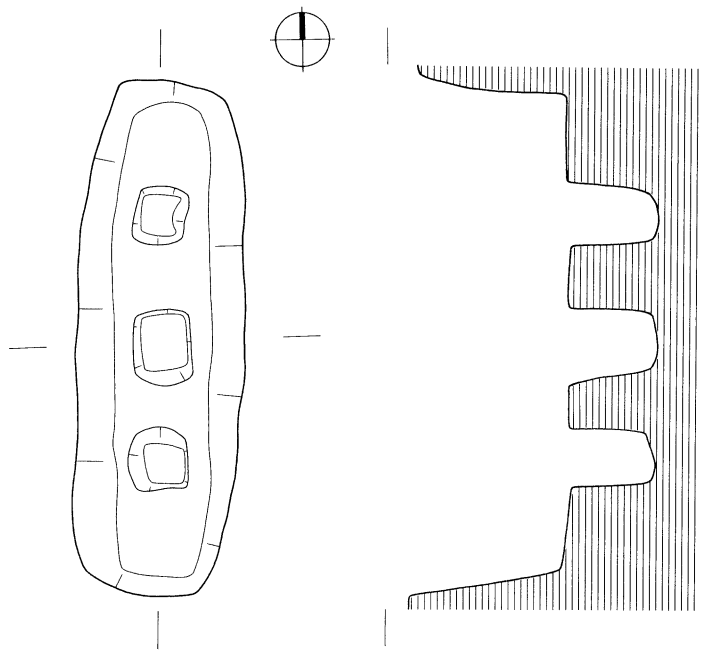
調査区域に設定したNo.31トレンチ西側のソフトローム上面において検出されている。平面形は長楕円形を呈し、長軸2.76m、短軸0.92m、深さは確認面より最大1.28mを測る。長軸方位はN-3°-Eを示す。底面の3ヶ所に方形のピットが認められ、深さは底面よりそれぞれ48cm前後を測る。覆土は自然堆積の状況を示し、壁は急激に立ち上がっている。遺物はまったく検出されなかった。

2号遺構（第10図・図版四）

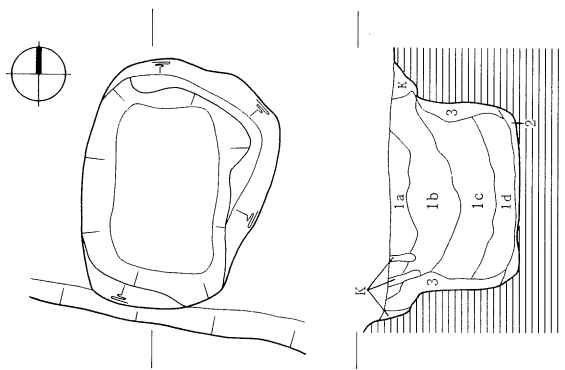
8号遺構に覆土上面を切られた状態で検出されている。平面形は不正楕円形を呈し、長軸1.34m、短軸1.04m、深さは確認面より72cmを測る。長軸方位はN-2°-Eを示し、底面はほぼ平坦であり、Pit等は検出されない。覆土は自然堆積の状況を示し、壁は急激に立ち上がっている。遺物はまったく検出されなかった。

3号遺構（第11～13図・図版五・九）

遺構 約坵弱は調査区域外に存在しており、全貌は明らかではないが、炉及び入口施設と考えられるPitの位置より推定される遺構平面形は、東西方向にやや長い隅丸方形を呈するものと考えられる。検出された西側壁の掘り込み上面幅は6.0mを測り、西側壁より推定される遺



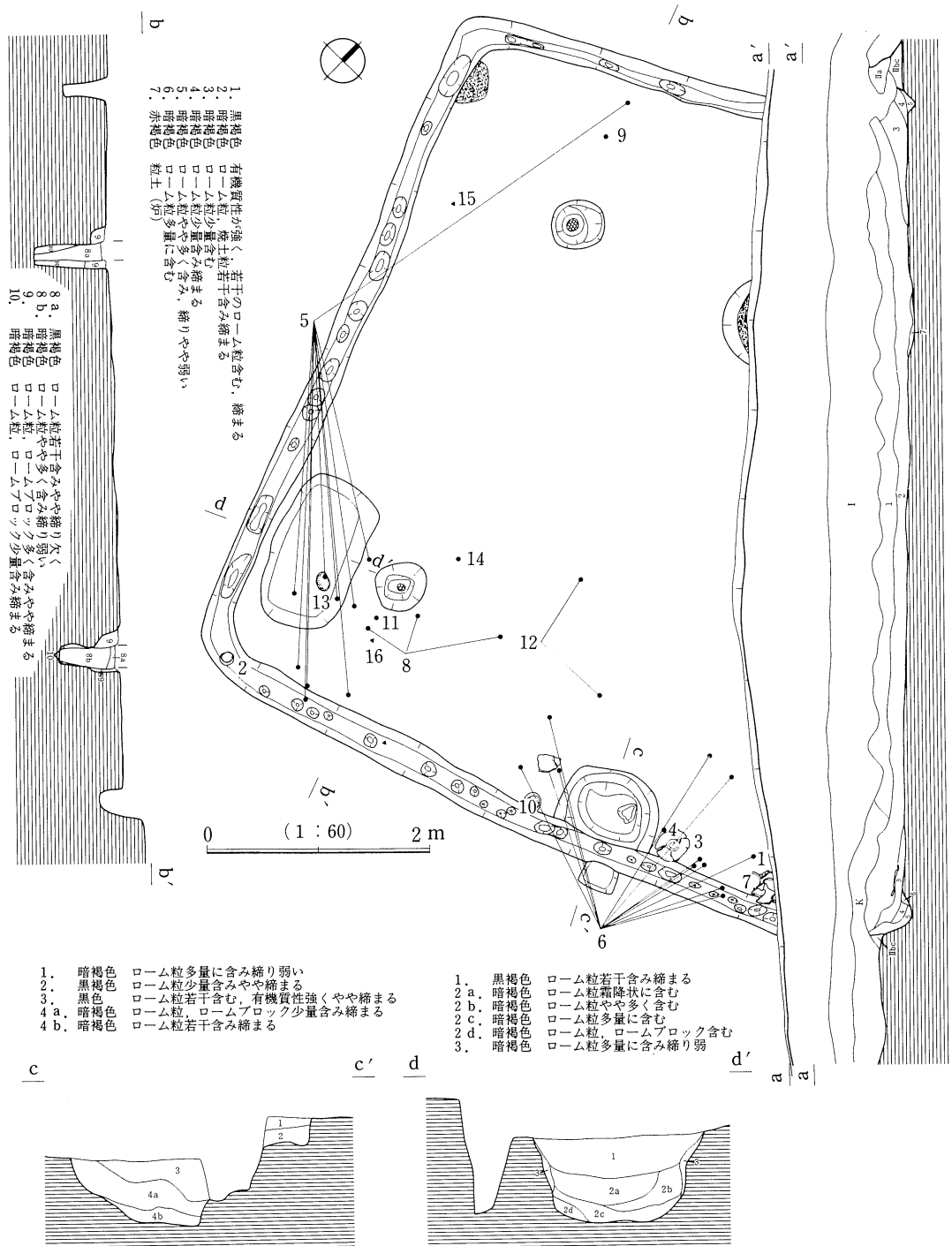
- 1 a. 黒褐色 有機質土層，ローム粒等はまったく含まず硬く締まる
- 1 b. 黒褐色 ローム粒若干含む，やや締め弱い
- 1 c. 黒褐色 有機質土層，ローム粒ほとんど含まず，1 a層に似る
- 1 d. 黒褐色 ローム粒若干含む，締めやや弱い
- 1 e. 黒褐色 ローム粒若干含む，硬く締まる
- 2. 暗褐色 ローム粒，ロームブロック多量に含むよごれた褐色土層
- 3. 褐色 ローム粒，ロームブロック多量に含むやや締まる



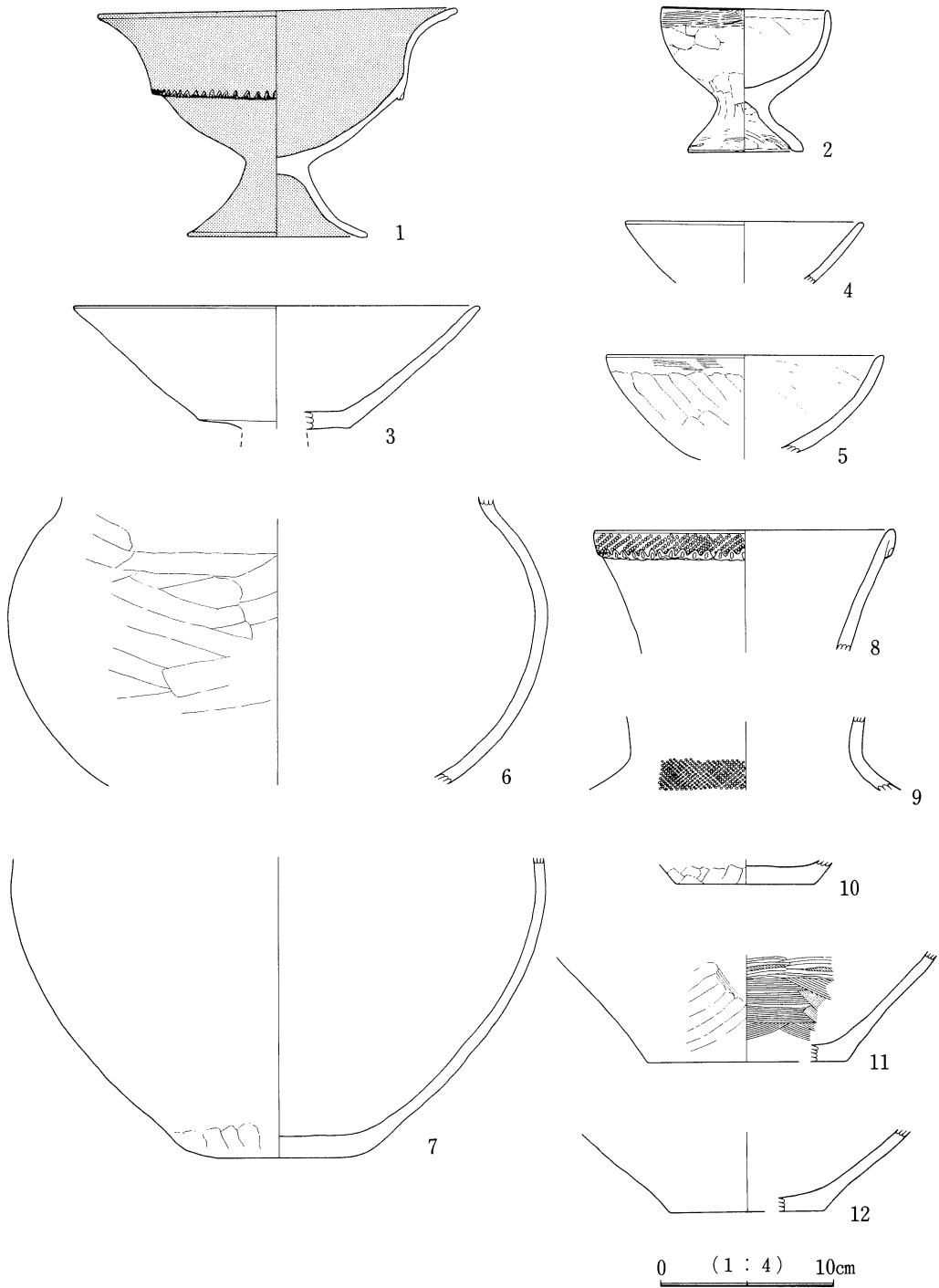
- 1 a. 黒褐色 ローム粒，暗褐色土少量含む
- 1 b. 黒褐色 ローム粒霜降状に多量に含む締まる
- 1 c. 黒褐色 ローム粒霜降状に少量に含む硬く締まる
- 1 d. 黒褐色 ローム粒若干含むが，有機質性強く硬く締まる
- 2. 暗褐色 ローム粒多量に含む締まる
- 3. 暗褐色 ローム粒，ロームブロック多量に含む

0 (1 : 40) 2 m

第10図 1号・2号遺構実測図

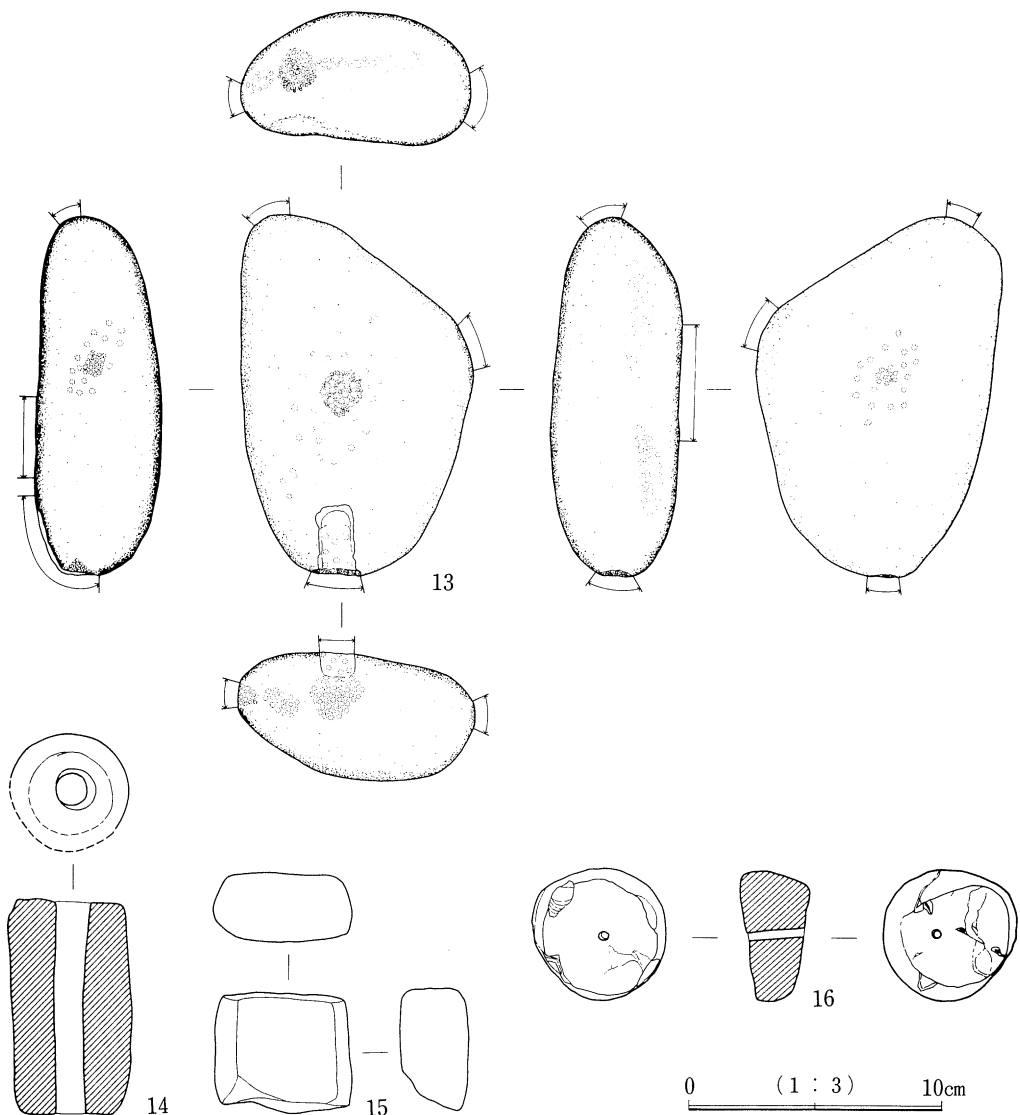


第11図 3号遺構実測図



第12図 3号遺構出土遺物実測図1

構の傾き方位はN-23°-Wを示す。掘り込みは北側に向うほど浅くなっており、前述した土取りによって削平されてしまっている。深さは南側で30cm、北側で10cm前後を測り、壁は急激に



第13図 3号遺構出土遺物実測図2

立ち上がっている。周溝は全周するものと推定され、深さは12~56cmを測りやや深い感がある。炉は中央北寄りに約 $\frac{1}{4}$ ほど検出されており、よく焼けている。支柱穴は2本検出されており、深さはそれぞれ72cm・55cmを測る。北側の方が深く、柱痕間は3.6cmを測る。南壁に接して掘りこまれているPitは、入口施設と考えられ、方形の張り出し部分を伴う播鉢状を呈しており、長径1m、短径96cm、深さは51cmを測る。西南コーナー付近には貯蔵穴と考えられる土壙が検出されており、長径1.38m、短径81cm、深さは床面より39cmを測る。床面は炉、柱穴、入口施設と考えられるPitを結ぶラインが全体的によく踏み固められており、壁際はやや軟弱である。また北西コーナー付近の床直上には若干の焼土が認められている。残存した住居跡覆土は、自

然堆積の状況を示す。

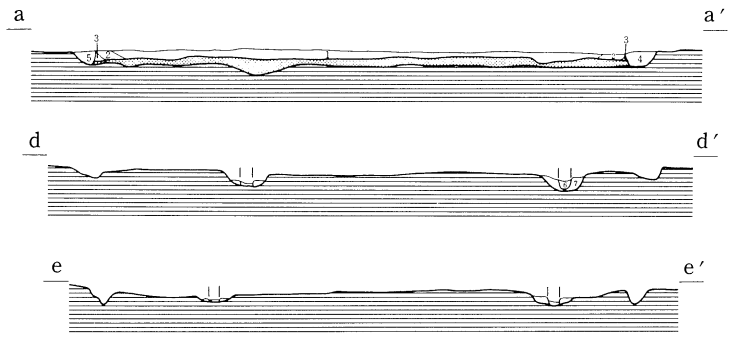
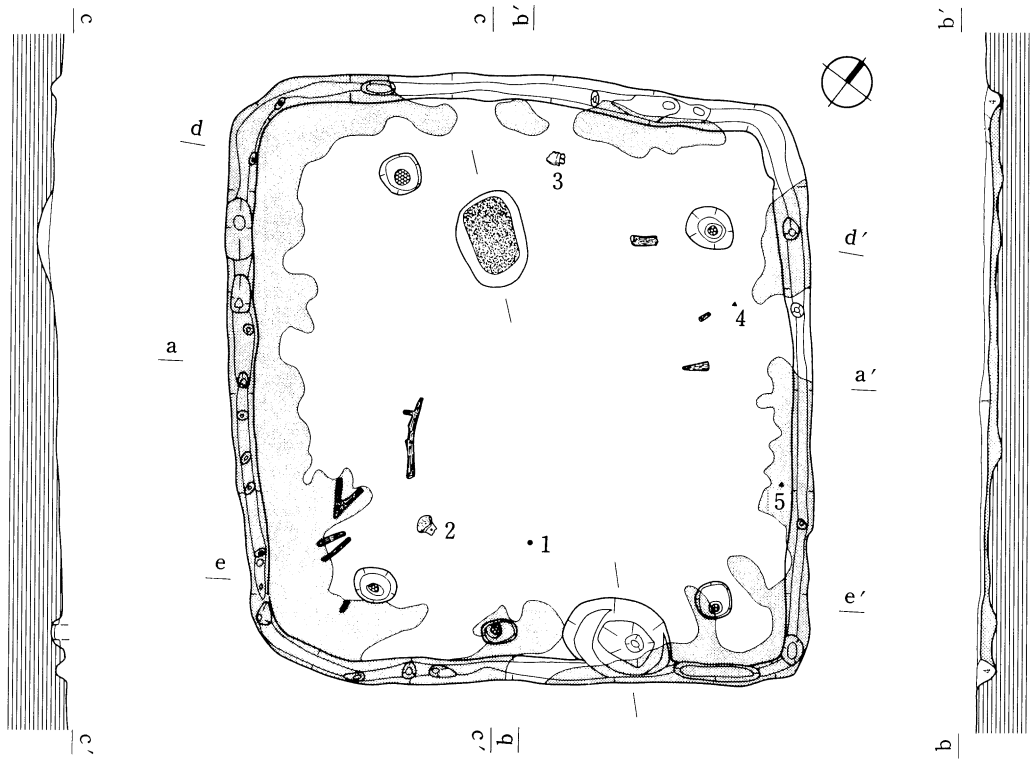
出土遺物 全体的に南壁際に多く検出されている。このうち2・3・7が床面から7cm程度浮いた状況で検出されている以外は、すべて床直上あるいは密着の状況で検出されており、いずれも本遺構に直接伴うものと考えられる。また5の一部及び13は貯蔵穴と考えられる土壌内からの検出であるが、いずれも土壌底面より20cm程浮いた状況で検出されている。13は磨石・敲き石・敲き台として使用された痕跡を有し、器面全面にわたって使用されている。14は管状土錘であり、中心に直径1.2cm前後の貫通孔を穿っている。15は磨製石斧と思われるが、両先端は欠損している。16は滑石製の紡錘車と考えられるが貫通孔の直径が3mm前後であり、特別に細い軸を使用したかあるいは紡錘車以外の使用が考えられる。

第3表 3号遺構出土土器観察表

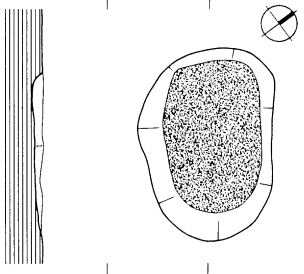
図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	高杯 ほぼ完	20.7	10.3	13.1	良好	暗茶褐色	密	杯部中位に段状の稜をもち、刻目状の刺突。内外面とも丁寧な篋ミガキ	内外面赤彩 7の下より検出
2	高杯 ほぼ完	9.6	6.6	8.3	良好	暗茶褐色	密	口辺ハケ状工具によるナデ。胴部篋ケズリ後ナデ。内面は器面の剝離激しい。	
3	高杯 脚部欠	23.4	—	—	良好	茶褐色	微砂粒多含む	外篋ケズリ後篋ミガキ。内面は器面の剝離激しい。	
4	杯? 1/7	(13.6)	—	—	良好	茶褐色	密	内外面とも丁寧な篋ミガキ。	高杯の可能性強い
5	杯? 3/5	16.0	—	—	やや不良	淡暗褐色	微砂粒多含む	外口辺部ナデ。体部篋ケズリ後ナデ内器面の剝離激しい。	高杯の可能性強い
6	甕 1/6	—	—	—	良	淡褐色	微砂粒少含む	外篋ケズリ 内器面剝離激しい	
7	甕 1/6	—	8.0	—	良	淡茶褐色	微砂粒多含む	内外面とも器面の剝離激しく、底部は摩耗している。	Iの上より検出
8	甕 口辺1/4	—	—	—	良好	暗褐色	密	口辺部折り返し。縄文及び刻目状の刺突を施す。他 篋ミガキ	
9	甕 頸部1/5	—	—	—	良好	暗褐色	密	頸部に縄文を施す。他 篋ミガキ	
10	甕 底のみ	—	9.0	—	良好	淡褐色	密	底部篋ケズリ	
11	甕 底部1/5	—	(11.4)	—	良好	暗褐色	密	外篋ケズリ 内 ハケ状工具による調整後篋ミガキ	
12	甕 底部1/6	—	(8.8)	—	良好	淡褐色	密	外篋ケズリ後ナデ、内 篋ナデ	

4号遺構 (第14~15図・図版六・十)

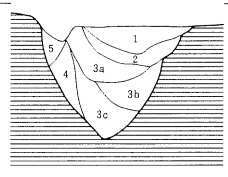
遺構 平面形は一辺およそ4.5m×4.5mの規模をもつ隅丸方形を呈し、主軸方位はN-38°-Wを示す。土取りによって覆土の大半はすでに削平されており、確認面からの掘り込みの深さは6cm前後を測る。壁際の床面上には焼土・炭化物が散在しており、火災住居跡であると想定される。床面は周溝付近を除けば、全体的に硬く引締った貼り床である。炬は中央北西より



0 (1 : 60) 2 m



1. 赤褐色 焼土粒多量に含む (炉)

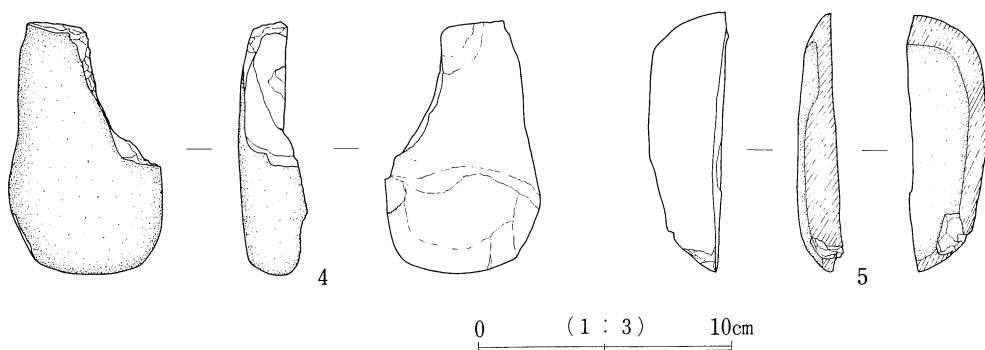
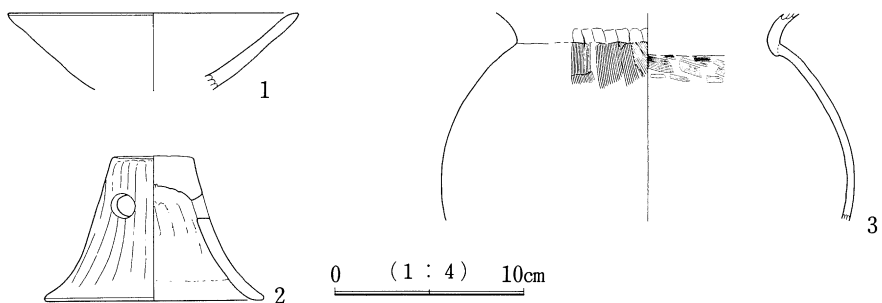


0 (1 : 30) 1 m

- 1. 黒色 有機質土ロームをほとんど含まない
- 2. 暗赤褐色 焼土、炭化物やや多く含む
- 3 a. 暗褐色 ローム粒若干含む
- 3 b. 暗褐色 ローム粒やや多く含む
- 3 c. 暗褐色 ローム粒少量含む
- 4. 暗褐色 ローム粒やや多く含む(締め)
- 5. 褐色 ロームブロック

- 1. 黒褐色 焼土粒少量含む
- 2. 暗褐色 焼土粒少量含む
- 3. 暗褐色 焼土粒少量含む
- 4. 暗褐色 焼土粒少量含む
- 5. 暗褐色 焼土粒少量含む
- 6. 暗褐色 焼土粒少量含む
- 7. 暗褐色 焼土粒少量含む

第14図 4号遺構実測図



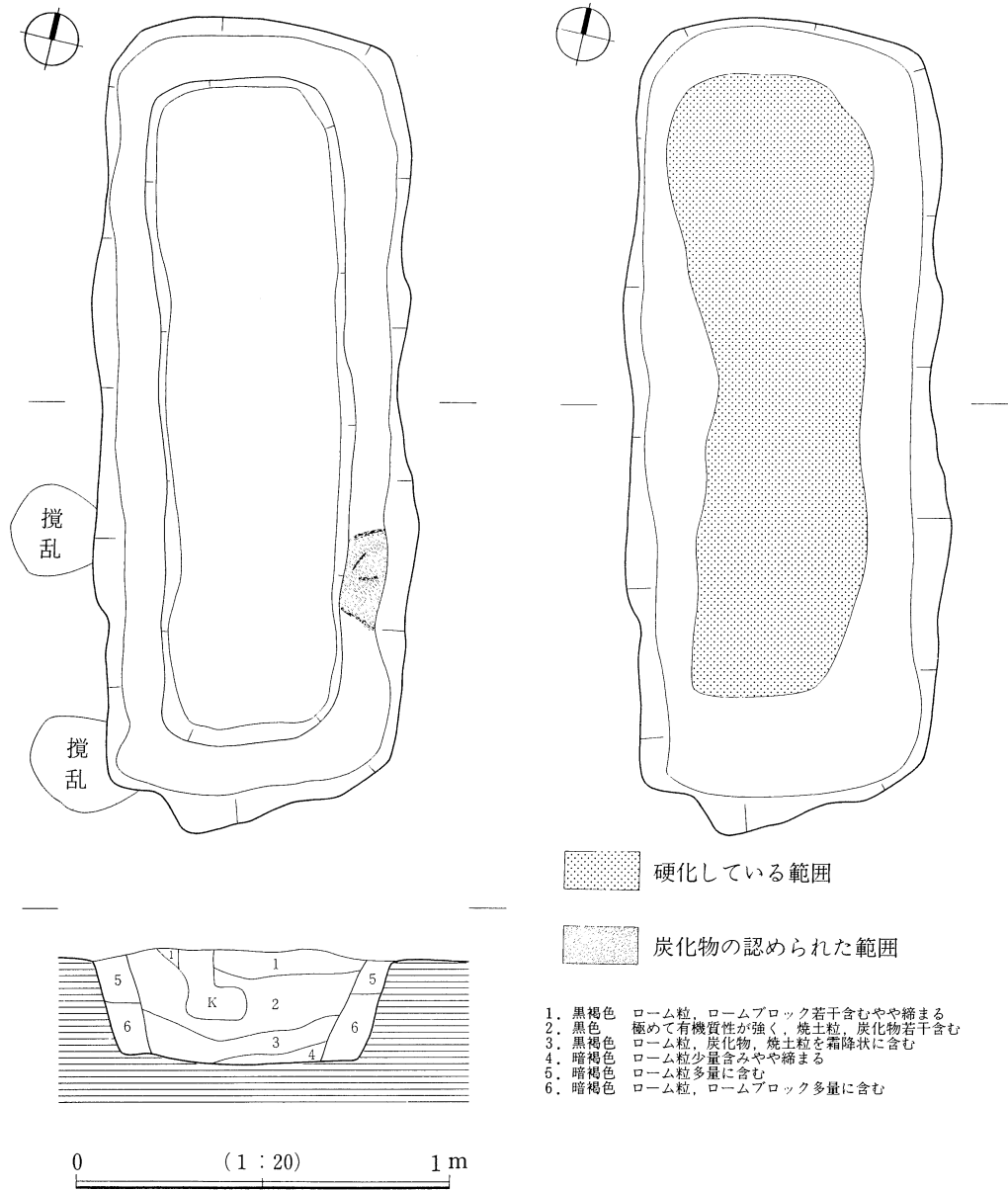
第15図 4号遺構出土遺物実測図

に検出されており、よく焼けている。主柱穴は5本検出されており、床面からの深さは10cm前後を測る。柱痕は明瞭に検出され、使用された柱の太さは直径10cm前後で統一されている。他に入口施設と推定されるPit が南壁に接して検出されており、平面形は楕円形を呈している。規模は長径90cm、短径60cm、深さは床面より45cmを測る。

出土遺物 遺物はすべて床密着の状況で検出されており、いずれも本遺構に直接伴うものと考えられる。4・5は磨石であり、いずれも約1/2が欠損している。また5は側面に光沢が表われるほど良く使用されている。

第4表 4号遺構出土土器観察表

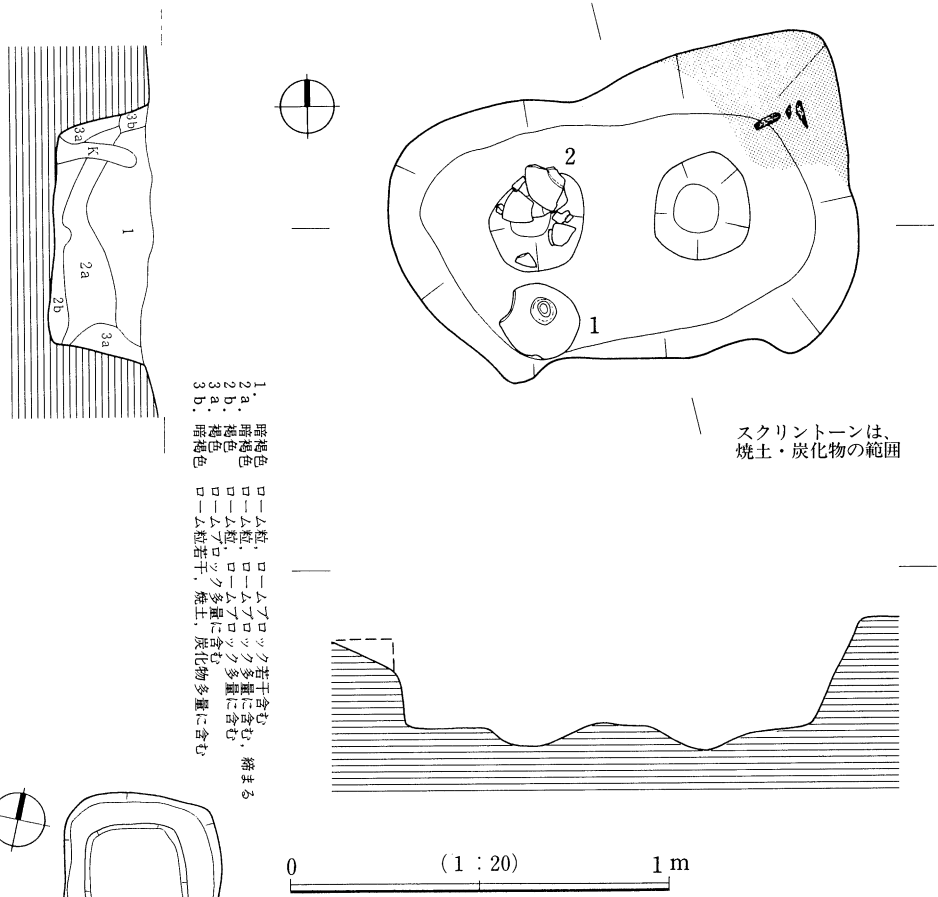
図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	杯? 1/4	15.4	—	—	良好	褐色	密	外口辺部横ナデ、他内外面鏡ミガキ	高杯の可能性アリ
2	高杯 坏部欠	—	11.4	—	良好	淡暗褐色	密	外ケズリ後ナデ、内篋状工具によるカキトリ後若干のナデ。脚部三方に有孔。	
3	甕 胴 1/3	—	—	—	良好	淡褐色	密	外ハケ目整形後若干のケズリ後ナデ 内ハケ目整形後ミガキ。	



第16図 5号遺構実測図

5号遺跡 (第16・18図、図版七)

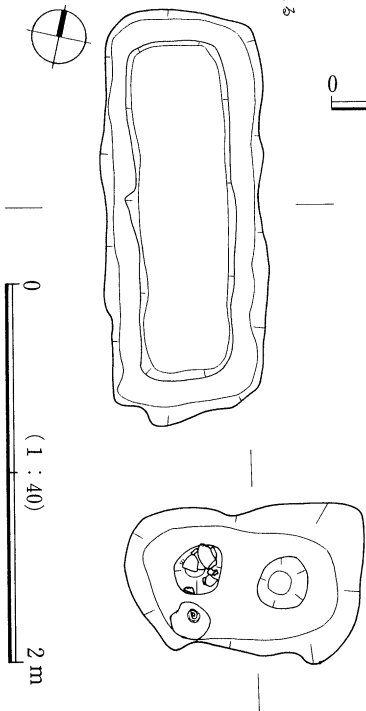
遺構 調査区域内南東方向に検出された木棺墓である。検出された墓壇の規模は、長軸2.16m、短軸82cm、深さは確認面より30cm前後を測り、平面形は長方形を呈している。埋土を約10cm下げた段階で中央に木棺痕跡が検出された為、廃土をすべてふるいにかけるという方法を取りながら調査を進めた。その結果、木棺の規模は長軸1.8m、短軸54cm、断面図によって検出される深さは、確認面より30cm前後を測り、平面形は箱形を呈している。主軸方位はN-15°-



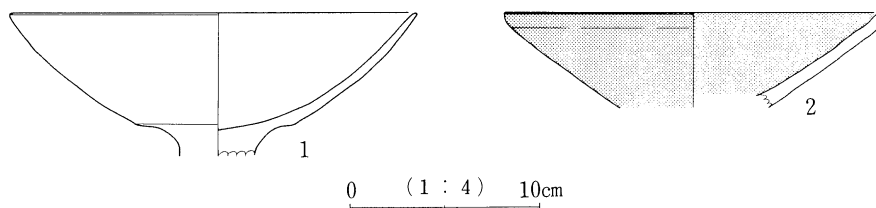
第17図 6号遺構実測図

Wを示し、墓壇の主軸方位の傾とほぼ一致する。棺内の覆土は、焼土粒・炭化物を混入した有機質土であり、裏込土上面の一部に厚さ3cmに達し検出されている炭化物との関連が考えられたが、詳細は不明である。墓壇底面はソフトローム中に掘り込まれており、木棺を設置した範囲のみ若干の窪を呈し硬化している。裏込土は、ローム粒、ロームブロックを多量に含み、木棺痕内の覆土と明瞭に区別される。

出土遺物 木棺内及び裏込土のすべてをふるいにかけてたが、木棺内より5mm大以下の赤彩土師器の破片数点を検出したのみであり、図示に至らなかった。



第18図 5号・6号遺構位置図



第19図 6号遺構出土遺物実測図

6号遺構 (第17~19図・図版七・八・十)

遺構 5号遺構南側に約50cm離れて存在する。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.24m、短径72cm、深さは確認面より30cm前後を測る。底面には皿状を呈するPit 2ヶ所が検出されており、深さは床平坦面よりそれぞれ6cm前後を測る。この2ヶ所の皿状Pitの中心を結ぶラインは、ほぼ真北に直交する。ソフトローム中に掘り込まれており、覆土は明らかに人為的埋土である。また北東コーナー付近には、検出面より厚さ5cmに達する焼土、炭化物の集中範囲が検出されており、遺構の位置関係を考えても5号遺構に深く関連のある遺構と考えられる。

出土遺物 1は南西コーナー部分に、2は皿状Pitにいずれも杯部を伏せた状態で底面密着の状態で検出されており、直接本遺構に伴うものと考えられる。またいずれも脚部を失った状態で検出されており、なおかつ脚部の破片すら遺構内から検出されなかったことを考えると、意識的に脚部を打ち欠いて埋納した可能性が考えられる。また2は赤彩を施されており、両者は別個体の遺物であることは明白である。

第5表 6号遺構出土遺物観察表

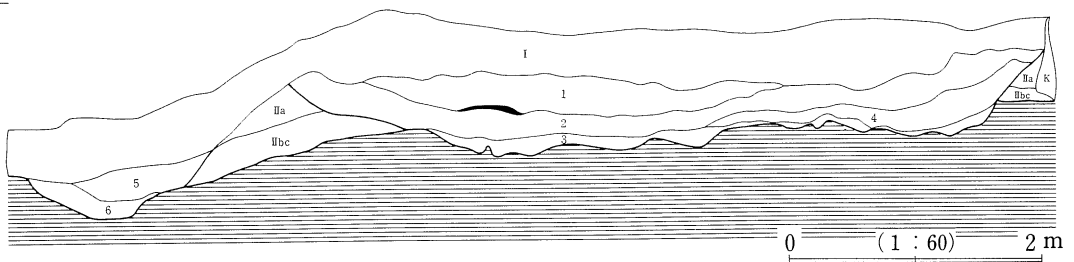
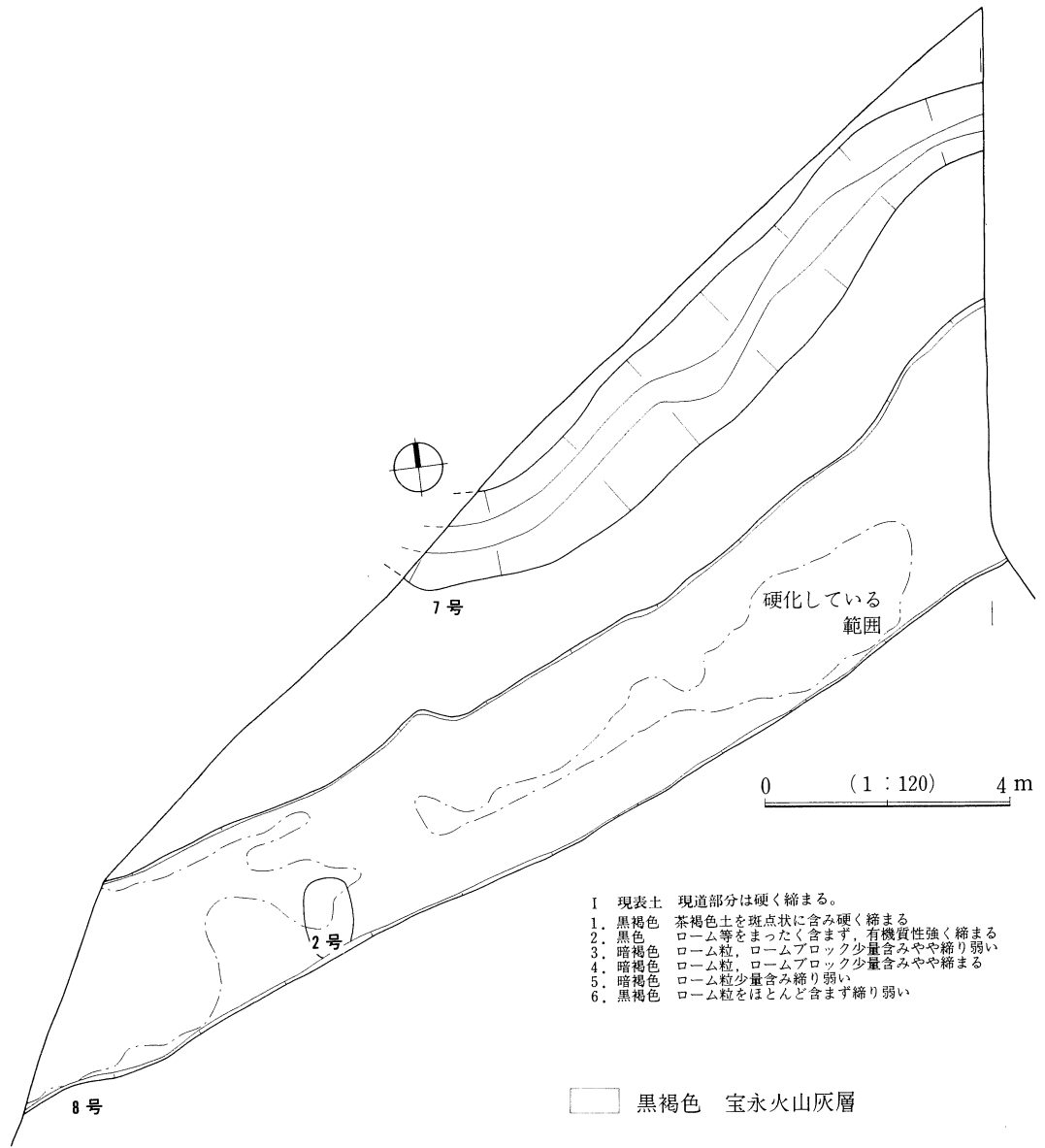
図番	器種 遺存度	法量(推定) cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	高杯 脚欠	21.4	—	—	良好	淡褐色	密	内外面とも丁寧なミガキ	
2	高杯 杯部1/2	20.0	—	—	良好	暗茶褐色	微砂粒多含む	外篋ケズリ後丁寧なナデ 内丁寧なナデ	内外面 赤彩

7号遺構 (第20図・図版八)

調査区域北端に検出されており、さらに東西方向へ延びる溝である。ソフトローム中に掘り込まれ、断面は逆梯形を呈している。覆土は自然堆積の状況を示すが、全体的に締りがなく、比較的新しい時期の溝であると考えられる。遺物はまったく検出されなかった。

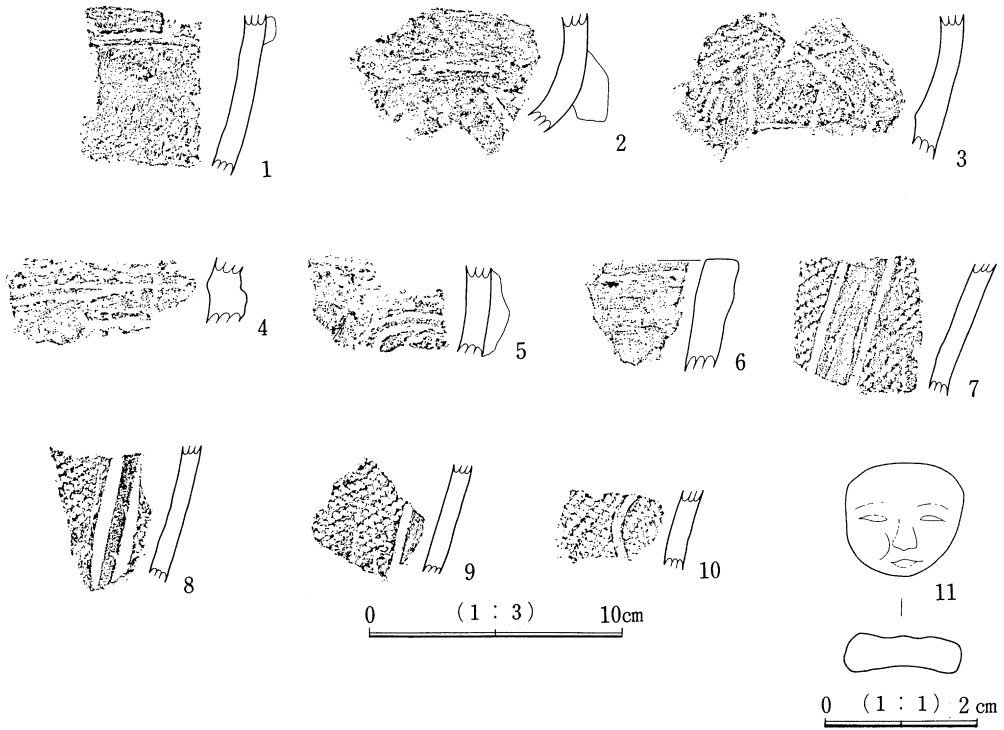
8号遺構 (第20図・図版八)

7号遺構の南側に検出された道路である。本遺構は現道として使用されており、最下層の3層以外は締まっている。1層と2層の中間に宝永火山灰層を検出していることから、江戸時代



第20図 7号・8号遺構実測図

にはすでに道路として使用されていたことが窺われるが、最下層の締りが弱く、また覆土層位も単純なことから、使用頻度は極めて低く、中世に溯る可能性は極めて少ない。



第21図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物

遺構外より検出した遺物を第21図にまとめた。1～5は胎土に雲母を含み、阿王台式土器の範疇に属するものと考えられる。6～10は胴部の懸垂文が特徴であり加曾利E期の所産であると考えられる。11は人面のいわゆる泥面子であり、江戸時代の所産であると考えられる。これらの遺物は調査範囲内より散在的に検出されたものであり、特定の遺構からの検出ではない。

第IV章 ま と め

最後に中潤ヶ広遺跡・天王台遺跡の調査によって得られた成果をまとめておきたい。

まず中潤ヶ広遺跡において検出された古墳であるが、周溝内より検出された土師器杯形土器は、6世紀後半の所産のものと考えられる。周溝内より約20cm程浮いた状況で検出されており、確実に古墳に伴う遺物としては捉えがたいが、付近に同時期の遺構が検出されていないことや、他に年代を決定すべく遺物に恵まれないため、ひとまず6世紀後半代に造営された円墳として捉えておきたい。

天王台遺跡における今回の調査範囲において検出された住居跡はわずか2軒であるが、隣接する杉林の中では該当期の土師器が散布しており、周辺に同時期の住居跡が存在する可能性が高い。この場合、今回の調査対象地東側には該当期の住居跡の検出をみなかったことや、遺跡の立地条件を考えると、今回検出された2軒をほぼ中心として、半円状に集落が展開しているものと考えられる。また当台地平面部は西側に開口する谷津最奥部に位置しているため、集落として利用される面積にもおのずから限度があり、当地に集落を営む場合最大でも5～6軒程度の小集落跡であろう。

(註1)
検出された2軒の住居跡や6号遺構出土の遺物について言及すれば、3号遺構出土高杯形土器1は、東京都町田市小山田遺跡群No.13遺跡YT2号住居跡出土の高杯形土器や、市原市草刈遺跡遺構外出土遺物に類似しており、同高杯形土器の系統を踏むものと考えられる。ただし、脚部が小山田遺跡群No.13遺跡YT2号住居跡のものに比べて短脚化していることや、供伴する造物から判断して、小山田遺跡群No.13遺跡YT2号住居跡出土の高杯より後出するものと考えられ、その年代は畿内第五様式終末～庄内式古段階平行期に位置づけられるものと考えられる。(註2)
また4号遺構出土甕形土器3は、3号遺構出土甕形土器と比較した場合、3号遺構出土の甕形土器よりやや新しい段階の所産と考えられるが、4号遺構の遺物出土量は少なく、両者は同時存在していた可能性も否定できない。(註3)(註1,4)(註5)

また6号遺構出土の2点の高杯形土器は、伴に脚部がまったく検出されなかったことから、埋納に際して意識的に脚部の破損を行った可能性が考えられることは前述したが、高杯形土器1は3号遺構出土の高杯形土器と同系統のものと考えられ、3号遺構と同時期の遺構であると考えられる。

以上のことをまとめると、天王台遺跡は畿内第五様式終末～庄内式古段階平行期に位置づけられる墓域を伴った小集落跡であろうと推定される。また残された未調査地域の一部は来年度当センターの事業計画として発掘調査される予定であり、それによって全貌はより明らかにされるであろう。

最後に整理作業の課程において便宜上、天王台遺跡の遺構番号を調査時遺構番号より第6表のように変更していることを申し加えておく。

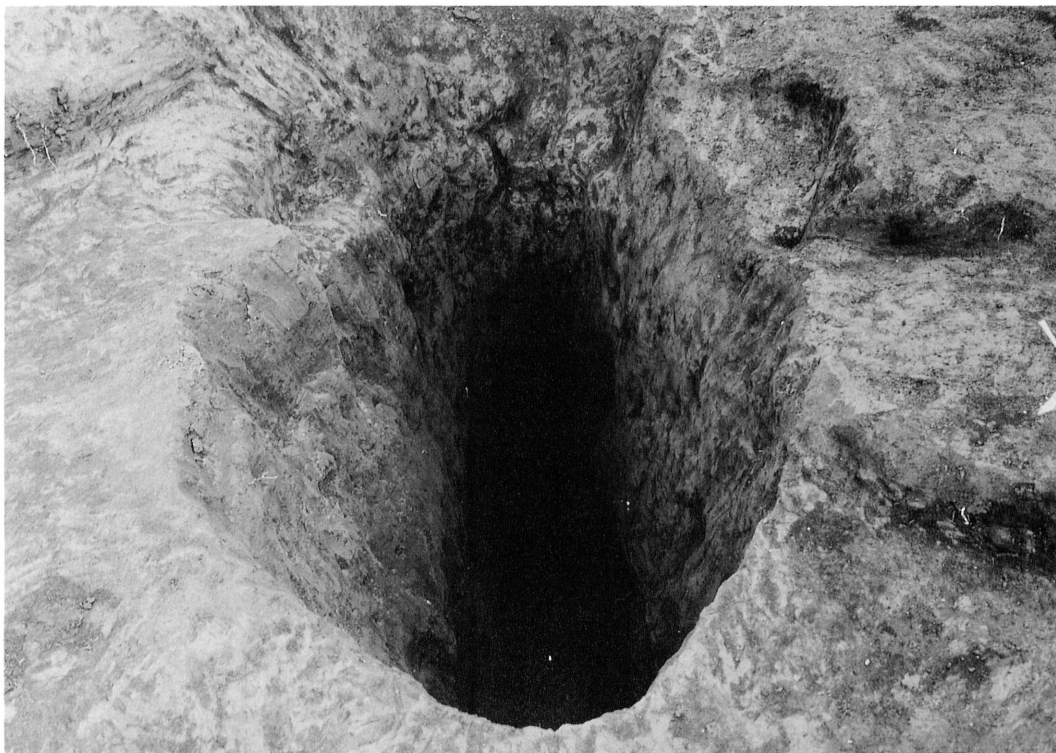
第6表 天王台遺跡新旧遺構番号一覧表

報告書遺構番号	調査時遺構番号	報告書遺構番号	調査時遺構番号
1号遺構 ←——	1号遺構	5号遺構 ←——	6号遺構
2号遺構 ←——	8号遺構	6号遺構 ←——	5号遺構
3号遺構 ←——	2号遺構	7号遺構 ←——	4号遺構
4号遺構 ←——	3号遺構	8号遺構 ←——	6号遺構

- 註1 比田井克仁「古墳時代前期の丘陵地域小集落について」『古代』75・76併号 1983
同論考によれば、天王台遺跡は「あり方A」に類属するものと考えられる。
- 註2 我孫子昭二・北原実徳「小山田遺跡群」 小山田遺跡調査会 1983
- 註3 高橋康男「草刈遺跡」市原市文化財センター 1985
同書P90～91。ただし同氏は該当遺物を台付鉢として報告している。
- 註4 比田井克仁「古墳時代前期高杯考」『古代』第74号 1983
また同氏は（註1）論考の中で（註2）出土高杯をF類とし、その時期を畿内第V様式と併行関係にあるとしている。
- 註5 大村 直「千葉県における弥生時代後期から古墳時代前期の様相」『古墳出現期の地域性』1984（第5回三県シンポジウム）
同氏に遺物を実見してもらい、同書P.465高杯形土器変遷模式図に使用された小山田遺跡群No.13遺跡YT2号住出土の高杯に後出する時期の遺物であるとの所見を得ている。



中潤ヶ広遺跡近景（南側よりのぞむ）



1号遺構全景



2号遺構（中潤ヶ広1号墳）検出状況



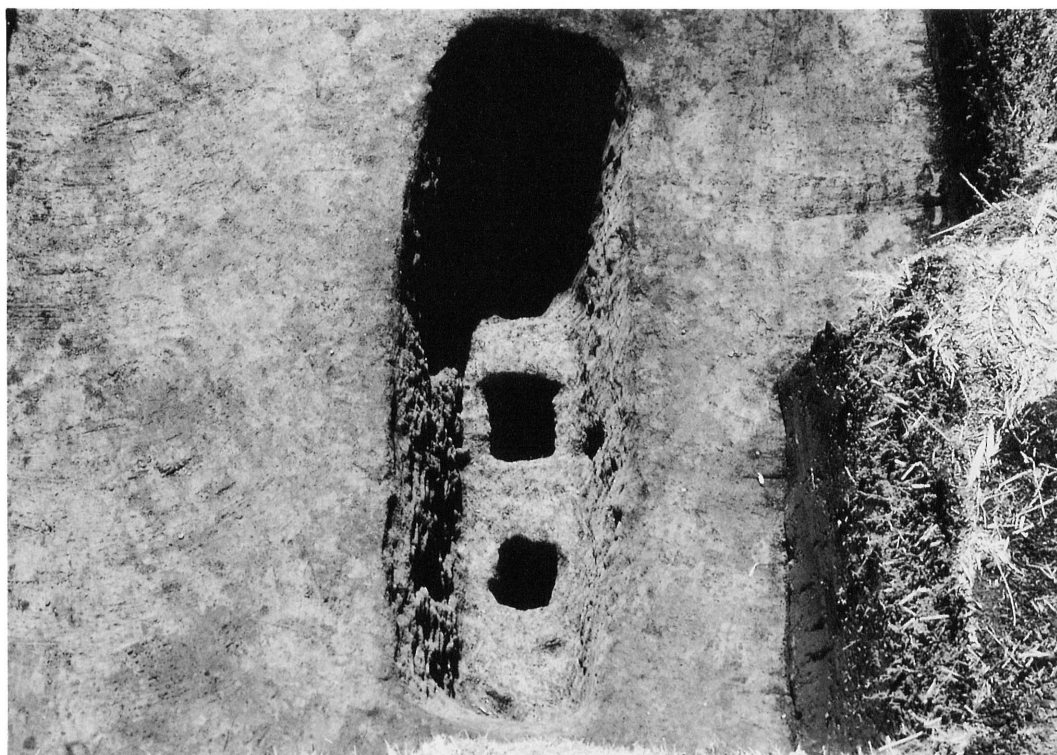
2号遺構（中潤ヶ広1号墳）周溝内遺物出土状況



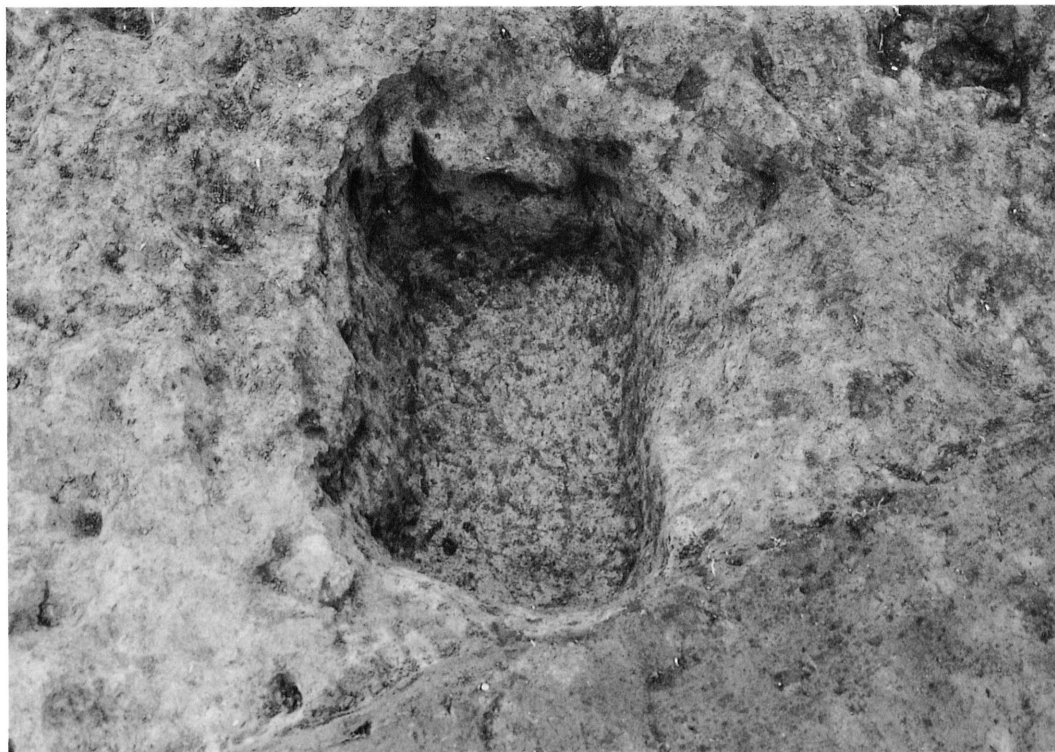
天王台遺跡近景（西側よりのぞむ）



天王台遺跡近景（東側よりのぞむ）



1号遺構全景



2号遺構全景



3号遺構遺物出土状況



3号遺構検出状況



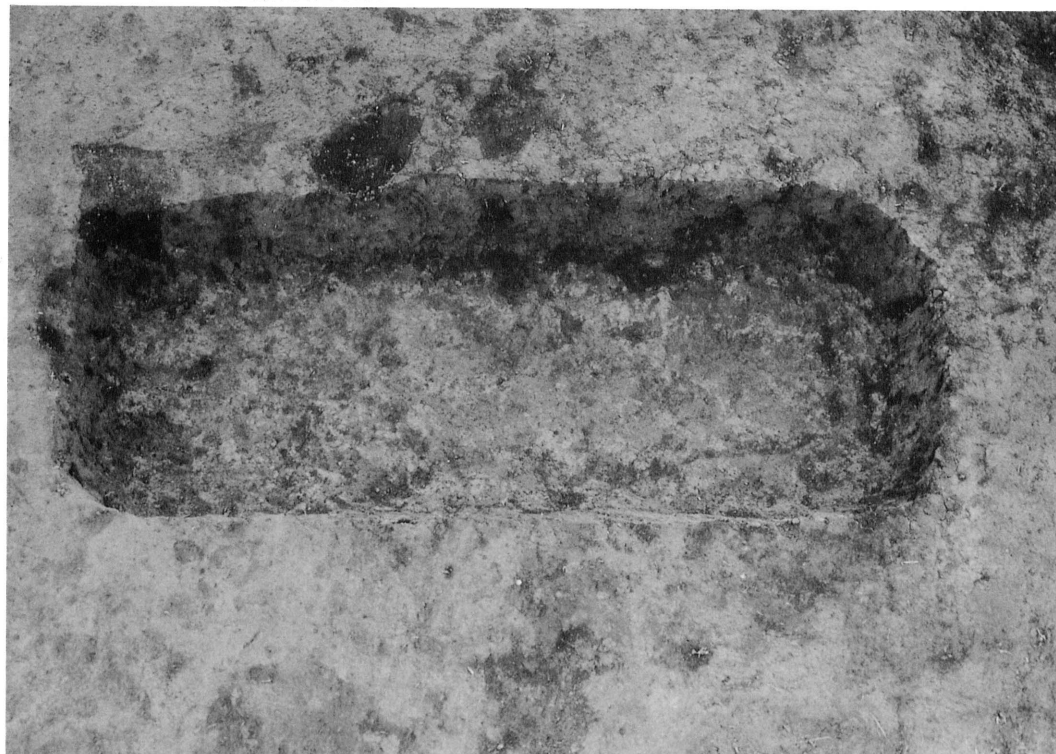
4号遺構確認状況



4号遺構全景



5号・6号遺構検出状況



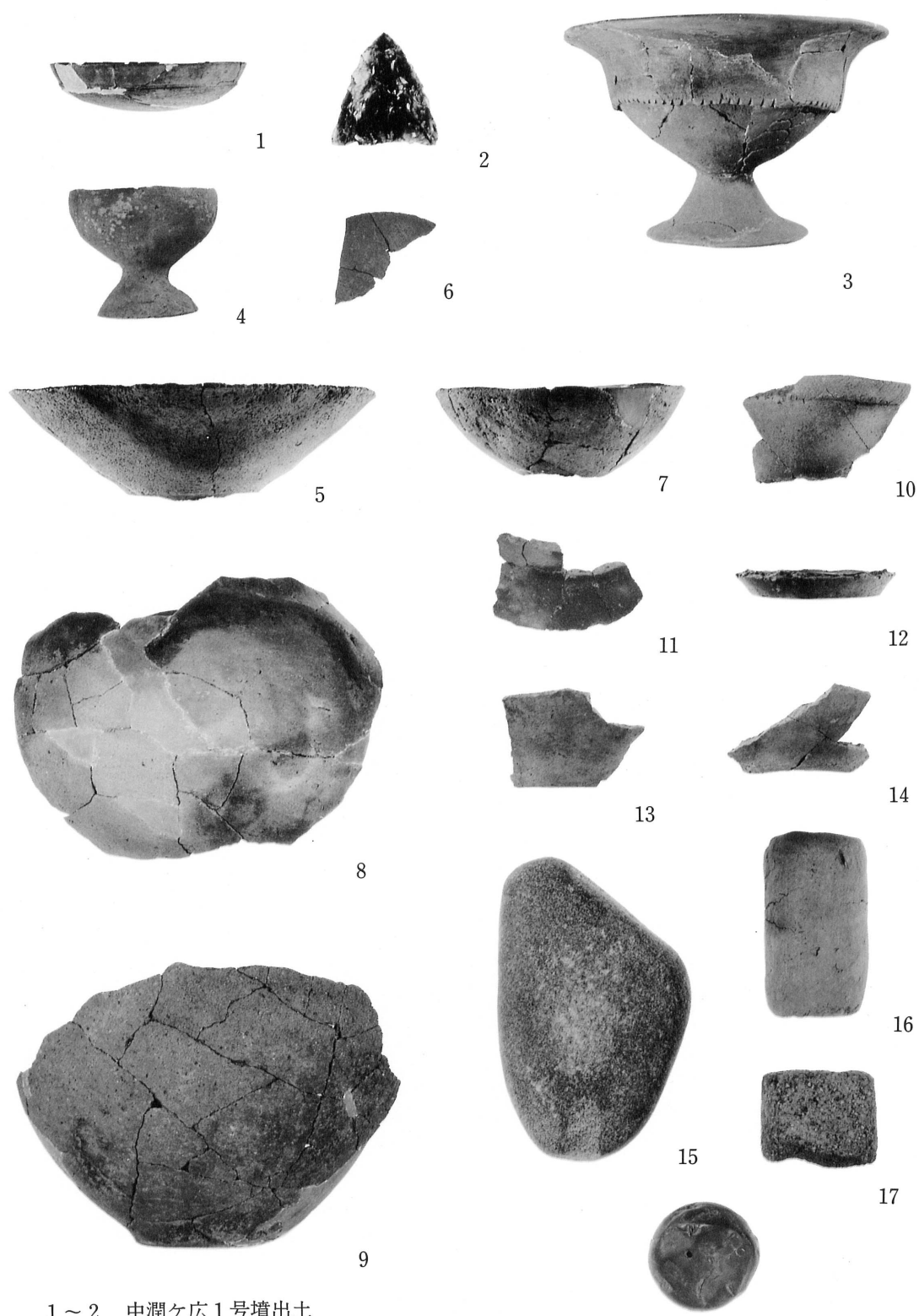
5号遺構全景



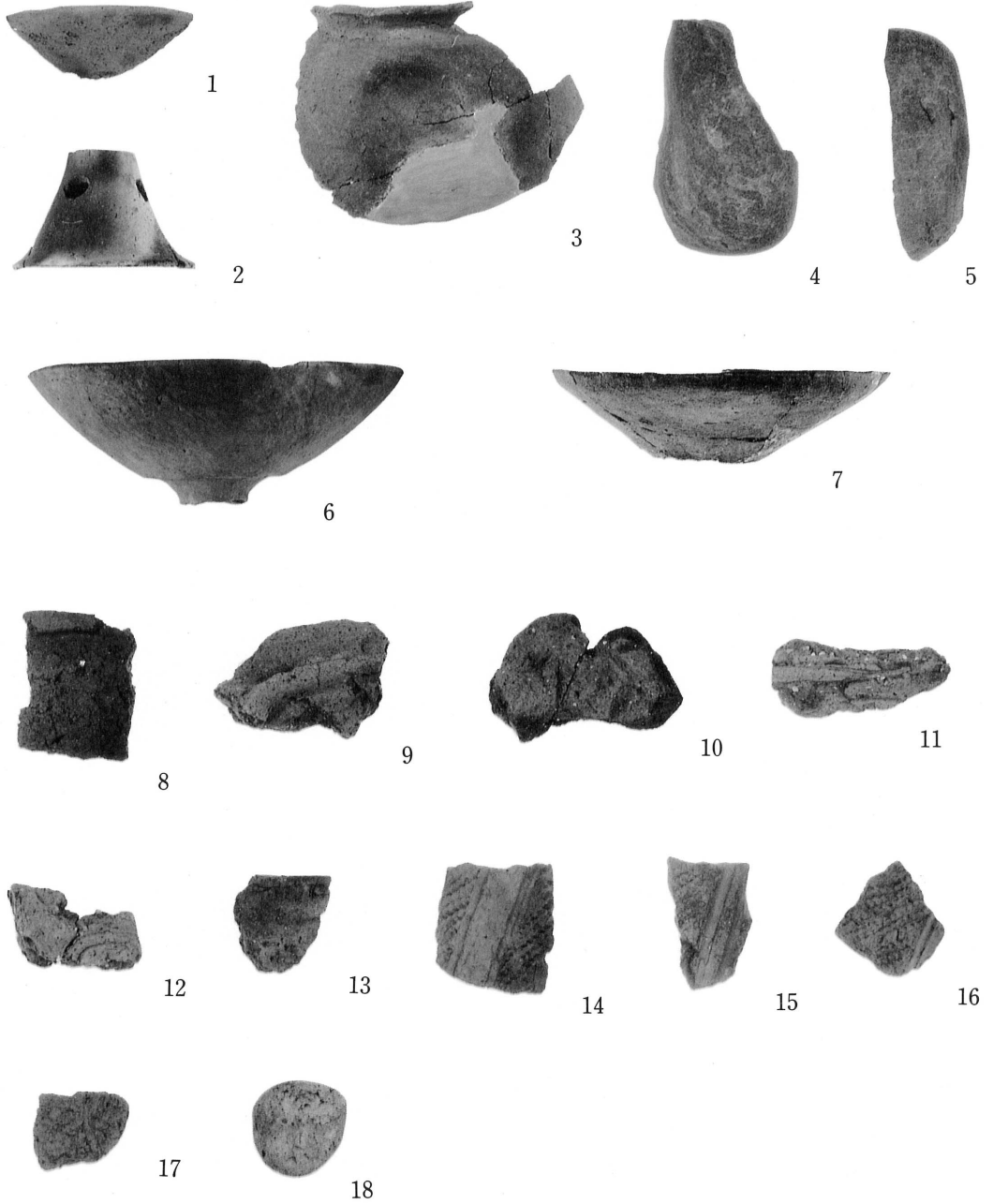
6号遺構遺物出土状況



7号・8号遺構検出状況



1 ~ 2 中潤ヶ広1号墳出土
 3 ~ 18 天王台遺跡3号遺構出土



1～5 天王台遺跡4号遺構出土
6～7 天王台遺跡6号遺構出土
8～18 天王台遺跡遺構外出土

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第27集

中 潤 ヶ 広 遺 跡 ・ 天 王 台 遺 跡

昭和63年 3 月26日 印刷

昭和63年 3 月29日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 市 原 市 土 木 部 道 路 建 設 課
財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市馬立817番地
Tel.0436(95)2755

印 刷 三 陽 工 業 株 式 会 社 市 原 支 店
千葉県市原市五井5510-1
Tel.0436(22)4348